
白と青

T.Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と青

【Nコード】

N0047N

【作者名】

T・Y

【あらすじ】

ロミオとジュリエット、ヴェローナを吹き抜けたたった四日間の命懸けの恋。その儚くも美しい恋物語の裏で、同時に綴られるもう一つの恋物語があった。

命を惜しむからこそ、美しい世界は彼と彼女を優しく包み込む……

2010年宝塚歌劇星組公演「ロミオとジュリエット」の二次創作です。

ロミオとジュリエットの本編の裏側で展開される、ロミオの従兄弟であり親友のベンヴォーリオと、モンタギュー家に奉公に来た少女との恋物語です。

出違い・1

——シルヴァーナ、ヴェローナへ行きなさい。

死の前日、彼女の母はそう言った。

ずっと苦しんでいた彼女の母が、今思えばあれは風前の灯火、嵐の前の静けさの様に穏やかな様子で娘の頭を撫でた。

——ヴェローナにはお母さんが昔お世話になつたお屋敷があるの。
あなたもそこで働かせてもらいなさい。

母娘の村は長閑だが貧しく、その暮らしもとても貧しいものだった。父親は彼女が生まれた時から既におらず、母親は昼も夜も無く懸命に働いてずっと女手一つで彼女を育ててくれたが、その母親が病気になるってからは毎日のパンとミルクにさえも困るようになった。彼女は村の人の好意で母親の代わりに羊の世話や針仕事でどうにか食いつなぐことができたが、それでも薬を買える程では無く、ただ衰弱して行く母親をせめて見守る事しかできなかった。そしてやがて母親が死に、埋葬だけの葬儀も終わると、昔から良くしてくれていた隣のお婆さんのお婆さんが一片のメモと手紙を差し出して来た。

お婆さんは生前母親に頼まれていたらしく、あの言葉通りヴェローナへの道のりとこれから世話になる屋敷への地図と手紙を渡してくれた。生まれ育った村を離れるのは寂しかったが、これ以上迷惑を掛ける訳にもいかない彼女は、その日の内に僅かな荷物と母親の遺品を古びたトランクに詰めて村を出た。

彼女の名はシルヴァーナ —— 16を迎えたばかりの少女の、たつ

た一人きりの新たな旅立ちだった。

「お嬢ちゃん、着いたよ」

故郷の村から半日程歩いた所で、幸運にも乗せてもらえた藁を積んだ馬車に揺られる事一晚、もうヴェローナの街門も程近く見える街道の別れ道まで来た所で、シルヴァーナは馬車から降りて貰った。

「ありがとう、おじさん」

二日程掛かるうという距離を半分の時間で来れた事に感謝しつつ頭を下げると、馬車の手綱を引いていた気の良い老人は、空きつ歯を見せてがははと笑った。

「なあに、ついでさ。ヴェローナはもう少しだ。気を付けてな」

「はい！」

昔から人には恵まれている方だと思う。彼女はそう思いながら遠ざかる馬車を見送った後、朝の爽やかな空気を一つ吸うとトランクを持ち直し、残りの道のりを縮める為足を踏み出した。

「…凄い……」

無事ヴェローナに到着し、門を潜った街の入口付近にどざりとトランクを置くと、シルヴァーナはぽかんと辺りを見渡した。

煤に汚れた粗末な家以外は畑と山の緑しかなかった故郷とは違い、

ヴェローナはしっかりとした石造りの高い建物で景色が覆われている、一見窮屈にも思えるが、水が高く吹き上がる見た事もない石の池やあちこちにある花壇の花や街路樹、それに珍しい品物が並ぶ露天等で充分目を賑やかし、更に色とりどりのお洒落な服を来て行き交うこんなにも大勢の人も初めてで、その波を見ていると目が回りそうになる。

生まれ育った村以外を知らない彼女にとっては、それはこれまで生きて来た人生の中で一番華やかで衝撃的な光景だった。

「これからここで暮らすなんて、私…大丈夫なのかしら…」

しかし好奇心よりも先に来た不安に心許なく胸許に手を彷徨わせると、彼女はふと自身の格好を見下ろす。

ヴェローナは大きな街だと聞いていたから、田舎者なりにもせめて格好だけはない、母親が若い頃だった一着だけ買い、後に譲ってくれた余所行きの白いワンピースを着てみたが、いざここに来るとやはり場違いな気がして少し恥ずかしい。

「っ……………」

一度そう思うともうそうとしか思えなくなり、シルヴァーナは急に周りが全員こちらを見て嘲笑っているように見え、急いでトランクを掴むとそそくさと大通りを外れて路地に入った。こんな格好ではもうとてもあんな往来で突っ立っている気にはなれなかった。

俯いたまま小走りですつと路地を選んで進み、彼女は早く屋敷に向かおうと居所が書かれたメモをポケットから取り出すが、その紙面を見ると思わず立ち止まった。

「……………何て、書いてあるのかしら…」

シルヴァーナは眉間を寄せて小首を傾げてみせるが、生まれてこのかた学校に通った事も字を習った事もない彼女は、縦にしても横にしてもそこに書かれている文字を読み取る事が出来なかった。

「困ったわ…。お屋敷の名前…おばさんが言っていたような気がするけれど…」

これから行く屋敷に出すという手紙もこのメモも、村で数少ない読み書きの出来る村長が書いてくれた物で、これを渡してくれたおばさんもよくは分かっているようで、一度だけ曖昧な感じで名前を教えてくれた筈なのだが、生憎慌ただしい中だったからよく覚えてはいなかった。

「誰かに聞かなくちゃ…」

そう思ってシルヴァーナは顔を上げるが、辺りに人気は無く、振り返っても闇雲に進んだ入り組んだ路地の中、戻り方も分かりそうになく途方に暮れる。いや、例え戻れた所で自分よりもずっと華やかな人に声を掛ける等到底出来そうになかった。

「おい、その君。そんな所に看板の様に突っ立っていられると通行の邪魔なんだが」

「…っ?!」

その時、ただ立ち尽くすしかない彼女に突然背後から誰かが声を掛ける。シルヴァーナはびくつと肩を震わすと、恐る恐る振り返った。

「全く、世間の若者は皆朝からこんなに慌ただしく動いているというのに、随分と年寄り臭い若者もいたものだ。ただまあ少し慌ただし過ぎる俺の友達にはその暢気さを少し分けてやりたい所だがね」

ペラペラと流暢におどけながら声を掛けて来たのは、眩しい迄に明るいタンポポの綿毛のような金髪と、人懐っこい笑顔を浮かべた黒いロングジャケットを羽織った青年だった。その青年は固まるシルヴァーナの顔を見ると目を丸くして、極軽い調子で顔を覗き込んで来た。

「…ん？その不安そうな顔に大荷物。…ひよっとして迷子？」

「え…あ…あの…」

初対面にも関わらず馴れ馴れしい態度と悪戯っぽい笑顔にどうしていいか分からず戸惑っていると、彼はシルヴァーナの手に握られたメモを当たり前の様に奪い、なにになに、とメモを見遣った。

「あ…！」

「…………ふん…、ここに行きたいのか？」

「…あ…はい…………」

シルヴァーナは読めるんだ、と感心しつつも、やはりこの青年は少し馴れ馴れし過ぎる気がして気が引ける。こういうのを本当に華やかというのかもしれないが、都会の人間全員がこうなら、やはり彼女には馴染めそうになかった。

「そうか…、じゃあ途中まで俺が連れて行ってあげよう」

「…えっ」

しかし居心地の悪さを感じている所にその突然の申し出。シルヴァーナはつい明からさまに渋い声を出してしまい、慌てて口を押さえる。それを聞いた青年も明からさまに顔を顰めると、チェッ、と舌打ちをしてメモを突き返してきた。

「なんだよ。折角の親切を失礼な奴だな。まあいいさ。一人で行けるなら行けば良い」

「あ、あの…」

「…ただ、この街は気を付けないと時たまともない事に巻き込まれるからな。特にそんなメモを間違った奴に見せようものなら…俺と一緒に安心だけど、一人なら充分気を付ける事だ。…じゃあね」

意味が分からないなりににも不安になるような言葉だけを残して、青年は素っ気無くシルヴァーナの脇を抜けて去って行く。しかし本当に遠ざかって行く足音を聞いている内に彼女の胸にはじわじわと不安が這い上がり、慌てて振り返ると青年の後を追って、必死に彼のジャケットの裾を掴んだ。

「あ、あのっ！ごめんなさい…！私こんな都会に來たの初めてで…不安だったんですっ…！字も読めないし…だからどうしていいのかわからなくて…」

「……………」

泣きそうになるのを堪えて訴えると、振り返ってはくれないが足を止めてくれる。

「だから…その…、道を教えて貰えるなら…すごく…助かります…」
「……………」

藁にも縋る思いでぎゅっと裾を握り俯いて答えを待っていると、頭上ではあ、という溜息が聞こえたのと同時に、裾を掴んでいた手を掴まれ持ち上げられた。

「皺になるだろう」

「あつ…ごめんなさい…」

シルヴァーナがはっ、として手を振り解くと、青年はいや、と目を逸らし、クルツとまた背を向けて歩き出した。

「……………」

シルヴァーナはやはり許してもらえないのか、と落胆するが、彼は数歩進んだ所で立ち止まり、振り返ると怪訝そうに言った。

「何してるんだ？早く付いて来いよ」

「…え？」

「案内して欲しいんだろう？言ってもこっちはそこまで暇じゃないんだ。もたもたしないでくれ」

「…！」

言葉とは裏腹ににかつと笑った青年に、シルヴァーナはほつと心が綻ぶのを感じると、ようやく笑顔を浮かべて彼の横に並んだ。

「はいっ！」

「急に嬉しそうにして…、現金な奴だな。で、君の名前は？」

「シルヴァーナです。貴方は？」

笑いを噛み締めながら聞かれたから聞き返すと、彼は少し考える風に上を向くと、うん、と一つ頷く。

「青い風、なんてどうだい？」

「…は？」

「秘密って事だよ。その方がミステリアスで面白い」

「私の名前は聞いたのにですか？」

「おつと細かい事を言っちゃいけない。それに馬鹿正直に答えたのは君の勝手だ。そうだろ？シルヴァーナ」

意地悪く笑い、行こう、とさつさと促す青年に彼女はムっとしたが、案内してくれるだけでも有り難いと思わなくては、と後を付いて行った。

出逢い・1（後書き）

涼紫央さんが演じたベンヴオーリオが個人的に大ヒットしたので、その熱意のまま書き始めました。

公演を見てないと分からない部分も沢山あるでしょうが、原作を知っているなら読めなくもないかな、と思います。多分…。

さくさく更新出来るかは謎ですが、どうぞこれからお付き合い下さい。

出逢い・2

「荷物、持とうか？」

「大丈夫です」

「ふむ…。物騒な世の中だからな、それが正解だ」

「そうなんですか？」

「何事も用心するに越した事はないだろう。最も俺はそんな泥棒なんて真似はしなくても充分潤っているけどね」

「あ、そんなつもりじゃ…」

「分かってるよ。ところで、君はその屋敷に何をしに行くんだ？」

雑談を交わしながらの案内の道すがら、自称青い風は何気なく聞いて来る。

「ご奉公に上がるんです。母も昔そのお屋敷にお世話になっていて…」

「へえ、じゃあこれからずっとこの街にいるんだ」

「そうなりますね」

「また会うかもしれないね」

「ええ」

シルヴァーナが微笑んで返すと、彼はふうん、と彼女をまじまじと見て、それからクスリ、と笑った。

「でもその白い服、これからもこの街で暮らすなら少しそぐわない感じだな」

「っ…！」

その言葉に折角忘れかけていた羞恥心を思い出し、シルヴァーナは楽しみ始めていた気持ちを忘れると、カッと頬に血を昇らせ、がばつと顔を逸らして声を荒げた。

「どうせ田舎者です！」

「え？」

「貴方達みたいにお洒落な服なんて着た事もないし、でもこの服だつて私からしたら充分上等で…！それに何よりこれは母の形見なんです…！そんな風に言わないで下さい！」

一気に捲し立て、肩で息をしながらきつ、と相手を睨みつけると、彼は意外にも気にした様子は薄く、やれやれと肩を竦めると苦笑を浮かべた。

「気に障ったのならすまない。でも、俺はそんなつもりで言ったんじゃないんだけどな」

「…？」

「それどころか、寧ろ嫌いじゃないな。その服」

そう言うとき青年はワンピースの胸元のリボンにスッと手を伸ばし、軽く持ち上げてシルヴァーナに顔を寄せる。

「白はまだ何色にも染まっていない可能性の色だ。…そう、まるで君のようにね」

「——…」

極間近で見るその顔は最初に思ったよりも端整で、これが気品という物なのだろうと感じさせる振る舞いは、まるで昔聞いた物語の王

子を連想させる。こんな間近で男の人を見た事も、こんなくすぐつたい言葉を囁かれたのも初めてで、シルヴァーナはどうしていいかわからず目を見開いたまま硬直してしまった。
しかし彼は優しい眼差しを一転ぶ、と細めると、真面目な表情を作る。

「だけど、ここで暮らすなら覚えておくといい」
「…え？」

青年はリボンを放すと、背を向ける。

「この街には対立する二つの一族がある。モンタギューとキャピュレット、この二家がそうだ」

「モンタギューと…キャピュレット？」

どこかで聞いたような名前に、シルヴァーナは首を傾げる。

「そう。ヴェローナはこの二派に別れ、もう何代にも渡りずっと争い続けている。そして君がこれから向かおうとしているのが、そのモンタギュー家だ」

「…！」

そう、確かおばさんが言っていた屋敷がそんな名前だったような気がする。

「つまり君は、これからはモンタギュー家に仕える者としてキャピュレット派の者とは対立しなければならない」

「それは…絶対に？」

「…少なくとも、表面的にはね」

実感は湧かないが、試すような視線を向けられてシルヴァーナは不安にぎゅっと胸を押さえる。しかし同時に母に言われた言葉を思い出し、はっとした。

——だけど、一つだけ約束して…シルヴァーナ。ヴェローナに行っても、あなたただけは何色にも染まってはいけない。

あの死の前日、ヴェローナへ行けと告げた後、彼女の母は哀しそうな瞳でそう付け加えた。あなたはあなたのままでいて欲しい、と本当に哀しそうに。

それは、この事なのだろうか。

もやもやとした物に黙ってしまったシルヴァーナに、彼は溜息を吐くとぼん、と頭に手を乗せて自嘲気味に呟いた。

「まあ、直にきつと分かるさ。…これから君は、一体何色に染まって行くんだろうね」

「………いいえ」

「ん？」

「いいえ、私は何色にも染まりません」

母を想い、彼女の口から自然に零れる否定の言葉に、青年は目を丸くする。

「私は難しい事は分からないけれど、例え周りがどんな争いをしていても関係ありません。私は私です」

そう、約束したのだ。

「青い風さん、貴方が嫌いじゃないって言うてくれた、この白みたいに……」

シルヴァーナは先程触れられたリボンを掴み、胸を張る。例え田舎者でも、この都会で生きて行く為のせめてもの矜持を示す為に。

「……………これは…驚いたな」

すると青年は感心した様子で目をしばたかせると、彼女の頭に置いていた手を外し、腫れ物のようにわざとらしく両手を挙げて退いてみせる。

「この街でそんな言葉を聞くとは思わなかったよ。いやいや中々に度胸のある娘さんだ」

「…馬鹿にしてるんですか？」

「いいや、恐いもの知らずだな、と感心しているんだ」

やはり馬鹿にしているではないか、とシルヴァーナはムツとするが、彼はただ笑い、行こう、とまた歩き出した。

「あれは噴水、あれは物乞い、あともう少し中心部に行くと円形競技場なんていうローマ時代の遺物もある。それにしても君は本当に物知らずだな」

「村から出た事が無かったんです。仕方無いじゃないですか」

やや小馬鹿にしながらも、青年はシルヴァーナに請われるまま物珍しい物の名を教えてくれる。先程一人で街に入った時とは違い同行者がいると、安心感からか同じ景色でも幾分余裕が出て来て、今度は不安ではなく好奇心の方が勝って彼女の目を輝かせた。

「村つてのがそんなに物が無いのなら逆に行ってみたくなるな」
「でも、戻れる事はあるのかしら…」

青年の言葉にシルヴァーナはふと村を出る時の寂しさを思い出す。
いつまで奉公をするのか、例えば結婚したとしたらその先はどうなるのだろうかとか、先を知らない不安。

「シル…」

「おい、向こうの広場でまたモンタギューとキャピュレットの連中が争いを起こしてるらしいぞ」

心とは裏腹に暢気な青空を溜息と共に眺めていると、通りすぎる街の人間が大きな声で先程覚えたばかりの単語を口にするのを聞き、彼女は意識を戻すと目を丸くしてそちらを向いた。

「青い風さん、モンタギューとキャピュレットって…」

「すまないシルヴァーナ。案内はここまでだ」

「え？」

何事かと聞こうとした矢先、青年の方から先にポンと両肩を叩かれ、シルヴァーナは驚いて振り返る。

彼は笑顔だったが、眉間に寄る皺や急ぐ様子からこの出来事に関わっている事が伺え、きょとんとする彼女に道の先を指し示した。

「ここから二筋目の通りを左に曲がって暫く歩くと服屋が見える。
その角を道なりに曲がって行くとやがて一際立派な屋敷が見えて来る。
そこが君の目的地だ。なあに、ここまで来たら後は迷う方が難しいくらいだ」

「でも…」

「おや、俺と別れるのが寂しいのかい？」

「……………」

しょんぼりと俯くシルヴァーナだが、すぐ様青年にからかう様に顔を覗き込まれると、頬を染めて目を逸らす。あながち間違いいではないのが悔しかったが、折角出会えた一応は親切な彼ともう縁を切るのは寂しく、また一人になる不安も考えるとどうしても惜しかった。シルヴァーナは俯いたまま黙ってしまいが、青年は苦笑を零すと優しく手を握ってくれた。

「大丈夫、必ずまた会えるから」

「こんなに広い街で…？」

「ああ。それに世間は案外と狭い物なんだ」

「そんな物ですか？」

「そんな物だ。君はどうか知らないけれど、俺は確実にまた君に会うのが分かっている」

「…？どういう…」

「おっと、早く行かないと。全く、本当に若者というのは慌ただしいものだよな。それじゃあシルヴァーナ、また会うのを楽しみにしているよ」

やたら確信的な台詞に怪訝とするシルヴァーナを残して、青年は名残を残す様子も無くあっさりと走り去って行く。引き止める間もなく遠ざかって行く背中を呆然と見送りながら、シルヴァーナは彼も忙しい中わざわざ付き合ってくれたのかもしれないと思い直すと、自分も急ごうと足を進めた。

「……………」

しかし数歩もしない内に速度は緩まり、やがてピタリと止まると、シルヴァーナはそっと青年の去って行った方向を見る。もう青年は

姿形も見えなかったが、胸に沸き上がった疑念が足を地に縫い付けて中々放さなかった。

対立するというモンタギューとキャピュレット。彼がそれに関わっているのはどうやら間違いないのだろうが、もし彼がキャピュレット側の人間だとしたら、再会出来たところでその後はどうなるのだろうか。わざわざモンタギュー家へ道案内をしてくれたくらいだからその可能性は薄いのかも知れないが、気紛れという言葉もこの世にはある。

「…ううん、そんなの関係ない」

しかしシルヴァーナは馬鹿な考えだと頭を振り疑念を遠ざけると、モンタギュー家へ急ぐ為ようやく足を踏み出した。

例え彼がどうであれ、自分さえしっかりしていれば派閥なんて関係はないのだから、と。

青い風の正体

青年に言われた通り服屋の角を道なりに往くと、確かに一際立派な屋敷が見えて来た。シルヴァーナはその大きさに緊張して及び腰になるが、屋敷の鉄柵門の前を暫くウロウロして心を落ち着かせると、意を決して敷地内に踏み込み、これまた立派な門を叩いた。そして暫く待っているとやがて扉の向こうに人の気配が現れ、扉が開けられた。

「はいはい、どちら様ですか？」

気風の良さそうな快活な声と共に現れたのは五十搦みの恰幅の良いおばさんで、シルヴァーナを視界に入れると丸い目を更にまん丸くして首を傾げた。

「…あ、あの、ここはモンタギュー様のお屋敷でしょうか？」

「ええ、ええ、確かにここはモンタギュー様のお屋敷ですよ」

「私、シルヴァーナと言います。これからこちらでお世話になるようにと言われて来たのですが…」

シルヴァーナはそう言って用意していた手紙を差し出すと、おばさんはそれを受け取り手紙と彼女を交互に見比べた後、ふつくと笑う。

「あたしやそこまで字が読める訳じゃないけど、シルヴァーナだね、あんたの事は聞いてるよ。いつ来るとは聞いてなかったから少し突

然で驚いたけどね」

「あ、ごめんなさい…。多分母が亡くなってからの話だから日にち迄は書けなかったんですね」

「おっかさんが？」

「ええ、三日前に病気で…」

口にするのはまだ辛いけど、どんな顔をしていいか分からず曖昧に微笑むと、突然ぎゅ、と柔らかい腕の中に押し籠められた。

「そんな風に笑わなくてもいいんだよ。大変だったろう？可哀相に…」

「…ありがとうございます。でもこれから一人でもしっかりなくちゃいけないですし、大丈夫です…」

暖かい腕の中は心地よく、会ったばかりなのに向けられる戸惑う程の優しさはシルヴァーナをほっ、とさせる。だが、故郷を出た以上もう何もかもを甘える訳にはいかない彼女は緩く首を振ると、そつ、と身体を放して笑んで見せる。おばさんはそれを見るとどこか寂しそうに眉を八の字にしたが、一息を吐くと腰に手を当てて、シルヴァーナを屋敷の中へ促した。

「さ、ともかくお入り。疲れたろう？少し休憩したらあたしらの仕事場を案内してあげるよ。この手紙は後であたしから旦那様に渡しておこう」

「はい、よろしく願います。それであの、お名前は…？」

「ああ、まだだったかい？あたしはアリーニア。アーニャって呼んどくれ」

本当に人には恵まれている、とシルヴァーナは桶でお湯を使いながら思う。屋敷に快く招き入れてくれたアーニヤはお茶とお菓子でもてなしてくれて、更にはこうして湯迄使わせてもらって身体を洗わせてくれる。ちゃんとした屋敷で働く以上例え使用人であっても薄汚れていては困るからだろうが、身嗜みを気にしたい年頃の少女にはそれを差し引いても余り在る喜びがあつた。他に会つた使用人仲間も優しそうな人達ばかりで、これからのここでの生活への不安も少しは薄れた。

「アーニヤさん、お湯ありがとうございます。とても気持ち良かったです」

すつきりした身体に用意してもらつた使用人用の服を来て、夕食の準備を始めているアーニヤの元へ戻ると、彼女はおやおやと手を止めて微笑んだ。

「さっきのワンピースもよく似合つてたけど、こっちも中々似合つてるじゃないか。若い娘はなんでも似合つて羨ましいねえ」

「そんな…」

シルヴァーナは照れてはにかむが、用意されたこの青を基調にした服を最初に見た時、新しい服を見る楽しみよりも、彼女は何故か青い風と名乗つたあのタンポポ頭の青年の言葉を思い出していた。

——これから君は、一体何色に染まつて行くんだろかね。

別に青年の言葉を額面通りに受け取つた訳ではないし、色が染められた服くらいなら今までも当然着た事はある。これを着る事で何か特別な意味が生まれるとも思えなかつたが、他の色が入り込む余地の無いこの青い服は何故か着るのを躊躇われた。せめてもの慰めは前掛けが白かつた事だろうか。

良くしてもらつておいて不遜だとは思うが、青年の言葉は彼女の心

に妙な響きを持って残っていた。

「さて、それじゃあ屋敷の案内をしようかね。その後は早速だが食事の用意を手伝っておくれ」

「はい！」

それでもアーニヤのこの暖かさは疑う余地が無く、シルヴァーナはここに導いてくれた母に心の中で感謝した。

「ちょっとアーニヤ、聞いたかい？今朝またうちの若様達とキャピユレットの連中が揉めたって」

一通り屋敷の中を案内してもらい夕食の手伝いに芋を剥いていると、買い物から帰って来た他の使用人の女がどかつと荷物を置きながら、鍋をかき回しているアーニヤに大声で話し掛けた。

「しかも今回は大公様までおでましになったって話さ。なんでも次に派手な騒動を起こそうもんなら容赦しないって言ったそうだよ」
「おやまあ、大変だねえ」

鍋から目を離さずさしてそう思っではいなさげな返事のアーニヤと、憤っているのか興奮しているのか分からないその使用人の温度差は激しい。しかしシルヴァーナは間には入らず、手を止めて芋を見つめる。

「あの人が行ってしまった騒ぎかしら……」
「ん？もう知り合いでもいるのかい？」

ぼんやりとした眩きにアーニヤが振り返る。

「ええ、迷子になっていた私をこの近くまで道案内してくれた人がいて。少し意地悪だったけど親切な方で……」

苦笑しながら答えると、彼女は身体を揺らして豪快に笑う。

「あはは！意地悪だけど親切なんて随分天の邪鬼な人がいたもんだね」

「……だーれが天の邪鬼だって？アーニヤ」

「……………?!」

その時、突然ここにいる三人以外の男の声がして、シルヴァーナは顔をそちらに向ける。

向けて、驚いた。芋が手から転げ落ちて、皮を溜めたボウルに飛び込む。

「おやまあ、誰かと思ったらベンヴォーリオ様、お早いお帰りで。

ロミオ様はご一緒じゃないんですか？」

「そこにいるよ。でもまた少ししたら出掛けるけど。それより誰が天の邪鬼だって？」

「いやですよベンヴォーリオ様ったら。天の邪鬼ってのはその娘の恩人の話ですよ」

「その恩人が俺だって言ったら？」

「へえ、そりゃビックリですよ。そうなのかい？シルヴァーナ」

目を丸くしてアーニヤは聞いて来るが、シルヴァーナは答えられずただ口をパクパクさせる。

厨房の戸口に肘を預けてニヤニヤと笑う、タンポポ頭と黒いジャケツトの青年は間違いなく先刻助けてくれて、そして今話題にした青

年で、シルヴァーナは何が何だか分からず混乱する。アーニヤは彼の事を青い風ではなくベンヴォーリオと呼んでいたが、その名は確かに屋敷内を案内して貰った時に聞いた、モンタギュー卿の甥御の名前ではなかっただろうか。それはつまり彼は自身が仕えるべき家の者で、すなわち主の一人という事になるのではないか。

「はは、驚いてる驚いてる。でもまた必ず会えるって言っただろう？シルヴァーナ」

目眩を覚えるシルヴァーナに青い風ことベンヴォーリオは笑いながら近寄り、気障な仕種で以て彼女の手を取ると、その手の甲に悪戯っぽく口付けた。

「うわ、土の味がする」

先程まで芋を剥いていたのだから当然なのに、彼は大仰に顔を顰めると舌を出す。全く紳士らしくない失礼極まりない行為だったが、頬を染めるよりも何よりも、シルヴァーナはただ信じられない思いで彼を凝視した。また会えると確かに彼は言っただけけれど、幾ら何でもこの再会は早過ぎる。

「ベンヴォーリオ、君がさっき言ってた女の子ってその子かい？」

柔らかい声と共に次に顔を出したのは、収穫前の小麦畑のような綺麗な黄金色の髪をした青年だった。彼もまた端整で整った顔立ちをしていたが、ベンヴォーリオと比べると雰囲気は柔らかく甘い、いかにも色男と言った風情だった。

「ああ、そうさ。中々素朴で可愛いだらう？」

「でも君が惚れるタイプには見えないな」

「友達だ、ロミオ。生憎まだそれ程ドキリとはさせられていないかな」

そしてロミオという名はモンタギュー卿の息子の名で、やがて彼がその名と家を継ぐのだと聞いている。しかし、やはりそれよりも何よりも彼女は言わずにはいられなかった。別れてからもずっとからかわれていたようで、悲しかった。

「…青い風さん、騙したんですか…？」
「…！」

ぎよっとするベンヴオーリオの後ろで、ロミオが軽く吹き出す。

「青い風？何だいそれ。君の新しいニックネーム？」

「いやっ、違うんだロミオ…！気にしないでくれ」

自ら名乗った偽名がばれるのを恥ずかしがったのか、ベンヴオーリオは慌ててロミオに首を振ると、じろっと恨みがましくシルヴァーナをねめつけた。

「随分人聞きが悪いじゃないか、シルヴァーナ。君は名前は聞いたけど、どこの誰とは聞かなかったじゃないか」

「でも、教えてくれても…」

「言つたろう？その方が面白いつて」

「私は面白くありません。本当に驚いたんですから」

「俺はそれなりに面白かったけどな」

それは当然仕掛けた本人は面白いだろう。だが、シルヴァーナはあの時別れまで惜しんだというのに、それを内心面白がっていたなんて。

悔しいやら悲しいやらで俯いてしまふ彼女を見兼ねたアーニヤは、代わりに若い主人を嗜める声を出した。

「ベンヴオーリオ坊ちゃん、おふざけが過ぎますよ」

「坊ちゃんて言うな。いつの呼び方だよ」

「こんなまだ右も左も分らない様な娘をからかつて遊ぶようなお人は坊ちゃんです。充分ですよ。可哀相にすっかり元氣無くしちまってそれとも坊ちゃんはこんな身寄りもない哀れな娘を一人追い出しちまいたいんですか？」

「う…」

コンコンと頭を叩きそうな勢いで木杓を振るアーニヤに気圧されて、ベンヴオーリオは小さく唸ると観念したようにガクリと頭を下げる。

「あはは、君の負けだなベンヴオーリオ。アーニヤに口で対抗しようなんて無謀以外の何物でもない」

「そのようだな…。全く、幾つになれば敵う様になるんだろうなあ」

「おや、そりや無理な話ってやつですよ。坊ちゃん達が歳を取る度にちゃんとあたしも歳を取っていきますからね」

「まさか皺くちやの婆さんになっても小煩く喋り続けるつもりか？」

「勘弁してくれ」

本気で嫌そうに肩を竦めるベンヴオーリオにカラカラと笑って、アーニヤは彼の背中を叩くときっちりシルヴァーナに向き合わせる。

「さ、ちゃんとお謝んなさいませ。使用人ならともかく友達と言ったのは坊ちゃんですよ」

「ちえ、分かったよ…。…悪かった。許してくれ、シルヴァーナ」

ふんぞり返るアーニヤを背後に罰惡そうに少し顔を背けて謝る姿は、

母親に叱られた子供以外の何者でもない。すっかり悪戯っ子の形を潜めてしまった彼の微笑ましい姿に、シルヴァーナはすっかり憤りを沈められると、くすりと笑った。

「もういいですよ。本当のお名前も知れたし、それに感謝している事には変わりありませんから」

「うん…、ありがとうシルヴァーナ。…俺の名前はモンタギューのベンヴォーリオ。これからよろしく頼むよ」

「はい！」

照れ臭そうに改めて自己紹介をしてくれるベンヴォーリオに、シルヴァーナは満面の笑みで応える。

そう、一先ずは彼が反目する側ではなかった事が、先程の懸念が杞憂であったことを意味し、まずはそれを感謝し喜ぶべきなのだろう。それはこの先も彼とは普通に接しても良いという事であるのだから。

「どうやらベンヴォーリオよりずっと懐が深いみたいだね、彼女は」
「そりゃそうですよロミオ様。でなきゃあの方の悪ふざけにまだまだ付き合おうなんてとても思えませんからね」

「ロミオ、アーニャ」

後ろでこそそと話す二人を拗ねる様に咎めるベンヴォーリオを囲むように、夕飯前の厨房は賑やかな笑いに包まれた。

モンタギュー家の夜・1

ヴェローナに来て最初の一日、あれ程慌しくあつという間に過ぎたというのに、深夜になって床に就いてもシルヴァーナは中々寝付けないでいた。

宛がわれた部屋は数人の使用人との相部屋で、屋敷の地下にあり、狭いスペースにベッドだけが並んでおり少し息苦しい。しかしちゃんと眠れさえすれば布団も枕も何でも良い筈だったが、こうして目が冴えるのは何か他に気に掛かる事でもあるからだろうか。

彼女は溜息を吐くと音を立てないようにベッドから降り、そつと部屋を抜け出した。

「綺麗…、星空は村とそんなに変わらないのね」

寝間着のまま暗い階段を手探りで上がり、青白く照らされる廊下を渡りながら、窓ガラスの向こうの星空を眺め、シルヴァーナは後にしてきたばかりの故郷を思い出す。星々の合間には銀色の月が浮かび、まさに恋人達が語らうには絶好の夜だったが、彼女には恋よりもまだ郷愁の方が強かった。

更にふらふらと歩いていると、ふと厨房から明かりが漏れている事に気付き、シルヴァーナは誘われる様に近寄ると中を覗き込んだ。

「アーニヤさん…？」

テーブルに燭台を置き、壁に黒い影をユラユラと揺らしながら、丸まった背中を向けて何か作業をしているのはアーニヤだった。声を

掛けると彼女はすぐ振り返る。

「おや、シルヴァーナ。こんな夜更けにどうしたんだい？」

「なんだか眠れなくて…。アーニヤさんこそまだお仕事してらしたんですか？」

アーニヤの手許には、針仕事をしていたらしく布と針が握られている。

「いいや、これは仕事でもなんでもないただの繕い物さ。眠れないならそうだね…何か話でもするかい？」

しかし彼女は邪険にする様子もなく優しく笑うと、扉の隙間から顔を出していただけのシルヴァーナを手招きし、もう一つ椅子を引き寄せた。

「…新しい街はどうだい？馴染めそうかい？」

シルヴァーナを座らせると、アーニヤは再び手許に視線を落としながら聞いて来る。

「大きくて知らない物も一杯で驚いたけど、親切な人達が沢山いるから、どうにか大丈夫そうです。特にアーニヤさんはとても良くして下さるから」

「あはは、お節介なだけだよ。でも…そうさね…、あんたのおっかさんと思うと…」

しかしアーニヤは笑っていたかと思うと急にその笑顔を寂しそうな物に変え、シルヴァーナは首を傾げる。

「？私の母が何か？…あ、そうだ、母は昔ここで働いていたって…」
そういえば、と思い出して問い掛けると、モンタギュー家で長く働いていると思われるアーニヤは、案の定顔を上げるとこくりと頷いた。

「ああ、よく覚えているよ。アドリアーナだろう？気立ての良い綺麗な娘だった」

「…！」

アドリアーナは確かに彼女の母親の名前だった。アーニヤは懐かしそうに目を細めると、シルヴァーナの頬に手を伸ばして撫でてくる。彼女の掌は年相応に乾燥していて少し固かったが、本人同様温もりが酷く心地良い。

「あんたよりも少し若い頃ここに来てね、よく面倒見たもんさ」

「…ここに行きなさいと言った時、母はとても穏やかな顔をしていました。それはきっと、母もアーニヤさんに良くして貰ったからなんです」

「アドリアーナが？…そうか、そう思ってくれてるのなら良かった。あの娘には辛い思いをさせたからね…」

「え？」

アーニヤは小さく苦笑すると、手を放して針と布を完全にテーブルに置いた。

「何も聞いていないかい？」

「はい…」

「父親の事は？」

「私が生まれる前に亡くなったとだけ…」

そういえばシルヴァーナは母から詳しく父親の話聞いた事がなかった。今の時代片親は珍しくはないし、最初から二人だったからそれを特に疑問に思った事も無かったが、今更ながらそんな事に無関心だった自分が少し恥ずかしくなった。

そんな彼女をアーニヤは笑うと、記憶を辿る様に顔を少し上向けた。

「そうだね、あれは確かアドリアーナが18になるかならないかの頃だったかね。子供が出来た、と言って来たんだ」

「私…?」

「そう、あんただ。で、聞けば相手はキャピュレット家の使用人だと言っじゃないか」

「…!」

「キャピュレットの事は聞いているかい？」

「はい、ベンヴォーリオ様に…。モンタギュー家とは昔から対立している」と

モンタギューとキャピュレットは対立しなければならない。そう彼は言っていた。

「ああ、だからそれはもうあたしらはえらい騒ぎになってね。取り敢えず旦那様の耳には入れてはいけないという話になった。何しろあの娘は旦那様にも気に入られていたからね、幾ら相手が同じ使用人といえど、キャピュレットはマズかった。だけど子供はどうしようもないし、何よりも二人は愛し合っていたから、あたしは二人をこの街から出すしかないと思った。幸いただの使用人、願えば辞めるのはそう難しい事じゃなかったのさ。だけど、不幸が起こったのはそこからだった…」

「不幸…?」

アーニヤの顔つきは神妙な物になり、見ていられない、という風にシルヴァーナを抱き寄せた。

「アーニヤさ…」

「殺されたんだよ…、あんたの父親は」

「……え」

そうして耳元で告げられた事実には、シルヴァーナは呆然とする。

「殺されたんだ…モンタギューとキャピュレットの争いに巻き込まれて…。街を出る為にアドリアーナと約束した場所へ向かう途中に…」

「……」

「ねえシルヴァーナ、アドリアーナは本当に笑っていたのかい？こんな争いのある街を恨んでいなかったのかい？」

——ヴェローナに行っても、あなただけでは何色にも染まってはいけない。

シルヴァーナはとても哀しそうだった母の顔を思い出す。

二人を引き裂いた両家の争い、彼女はきつと嘆いたに違いない。名前なんて飾りでしかないのに、それが違うだけで同じ人間同士争ってしまふこの現実を。

——モンタギュー家に仕える者としてキャピュレット派の者とは対立しなければならない。

そして、それがもう当たり前前のようになってしまうこの街の人々を。

「――母は……母は、穏やかでしたよ……」

けれどシルヴァーナは、アーニヤにはそれだけを伝える。両親の事をこんな風に悲しんでくれる、彼女にはそれだけでもう充分だったから。それに、母がもしこのモンタギュー家を恨んでいたなら、娘を一人送り込んだりはしないだろうから。

「そうかい……、なら良かった……」

アーニヤはゆつくりと離れると目尻を払う。シルヴァーナは微笑むと今度は自分から彼女の手を握った。

「ありがとう、アーニヤさん。お陰で父の事が少し知れました。びっくりしたけど、娘の私が知っていてあげなきゃいけない事だったんですね」

「……初めて会った時も思ったけど、あんたは強いね、シルヴァーナ」

アーニヤは心配そうに見つめて来るが、シルヴァーナは首を振る。

「強い振りをしているだけです……。本当に、しっかりしなきゃいけないから」

「気持ちには分かるけどね、余り無理をしちゃ駄目だよ？」

「……はい」

やや呆れたように言うアーニヤに苦笑して頷いた所で、背後から力タ、という音がして、二人は驚いて振り返った。

「……あれ？まだ誰がいるかと思ったらアーニヤにシルヴァーナじゃないか」

「ベンヴォーリオ様……！」

昼間と同じ様に厨房の戸口に手を掛け、目を丸くして立っていたのはベンヴォーリオだった。違うのは着ている物がああ黒いジャケットではなく、上下白の道化のような衣装だという所だろうか。手には仮面も握られている。一体どこに行っていたのか、あの後ロミオと一緒に再び出掛けてから今まで戻っていないかった彼は、驚きつつも厨房に入ってきて来ると水瓶から水を掬って一気に飲み干した。

「ああ、美味い。ロミオの所為で無駄に走ってしまったから喉が乾いて仕方なかったんだ」

「お一人ですか？それにその格好、一体どちらに行ってらしたんです？夜遊びも大概にしないと旦那様達も心配してらっしゃいましたよ」

アーニヤが怪訝そうに訊ねると、相手も怪訝そうに見返して来た。

「ロミオは戻っていないのか？」

「ええ、あたしや今晚はずっとここにいましたけどね、誰の足音も聞こえませんでしたよ。ご一緒じゃなかったんですか？」

「一緒だったけど途中ではぐれた。…やっぱり戻ってないのか。一体どこ行っただんだ？」

ベンヴォーリオはあ、と溜息を吐く。アーニヤはそれを聞いて顔を顰めた。

「まさか何か危険な事に巻き込まれてたんじゃないでしょうね？勘弁してくださいよ」

「うるさいな、大丈夫だよ。それより二人こそ何をしてたんだ？」

「この娘が眠れないって言うからちよいと昔話をね」

「ふん…」

秘め事をするように目配せするアーニヤにシルヴァーナも笑んで頷く。ベンヴォーリオはそれを面白く無さそうに見ていたが、突然何かひらめいたようにぱつと顔を明るくすると、間に割り込んでシルヴァーナの手を取った。

「じゃあ眠れないついでに俺にも付き合って貰おうかな」

「えっ……」

驚く彼女にベンヴォーリオはウインクを飛ばし、手を引っ張って立たせる。

「年寄りの昔話よりは退屈させないよ。アーニヤ、彼女を借りてもいい？」

「……駄目なんて言う権利はあたしにはありませんけどね、無体だけはよしてくださいよ」

「あんたは俺をなんだと思ってるんだ。さ、行こうシルヴァーナ」

「え……あのっ……」

「いいからいいから」

困惑したままぐいぐいと引っ張られ、シルヴァーナはアーニヤを振り返る暇もなく連れ出される。

ただ厨房から出る瞬間、背後でアーニヤの溜息が聞こえた気がした。

モンタギュー家の夜・2

「…ベンヴォーリオ様、一体どこまで行くんですか…?」

「俺の部屋」

「?!」

手を引かれたままとぼとぼと廊下を歩きながら訊ねると、ベンヴォーリオはさらりと答える。シルヴァーナはぎょっとしたが、彼は構わずしきりに外を気にしている。

「…ロミオ様ですか?」

アーニヤに釘を刺されたから妙な事はしないだろうが、うなだれつつその様子を指摘すると、ベンヴォーリオは気不味そうにチラッとこちらを見た。

「…今日会ったばかりの君に聞いても仕方ないだろうけど、俺はそんなにいつもヤツを気にしてる風に見えるか?」

「すみません…」

「謝って欲しいんじゃない、聞いてるだけだ。で、どうなんだ?」

催促するように手を揺らされ、シルヴァーナはぽつぽつと話し出す。

「…小さい頃からとても仲がよろしいと聞きました。…実際そう見えませんでした」

「ああ、間違いじゃないな」

「ベンヴォーリオ様もご家族とお屋敷があるのに、こちらにずっと居候状態だつて聞きましたけど、それはロミオ様がいらっしゃるか…?」

従兄弟だから気兼ねもしないのだろう、とアーニヤは言っていた。ベンヴォーリオは少し照れ臭そうだが、にかつと笑う。

「他の誰というよりロミオと遊ぶ方がずっと楽しいんだ。ロミオと一緒に街に繰り出して仲間と遊ぶ。特にマーキューシオっていう奴も入れて3人揃うと最高なんだ」

シルヴァーナに向ける悪戯っぽい笑顔とはまるで違う、少年のように瞳を輝かせて楽しそうに笑う姿は、本当にロミオを大切に思う様子が伝わって来て微笑ましい。

「じゃあロミオ様を気にするのは当然なんだと思いますから、それ程気にする事もないんじゃないですか?」

そんな彼にシルヴァーナはくすくすと笑いながら答えるが、本人はでもなあ、と口を尖らせる。

「皆ロミオの事を何でも俺に聞くのは止めて欲しいんだよ。どこにいるのかとか一緒にじゃないのかとか、拳げ句の果てには恋の橋渡しなんてのも頼まれる。俺はあいつの友達であつて、従者でも保護者でもないんだからさ」

幾ら大好きな友達でも彼なりに不満はあるらしく、ベンヴォーリオはブツブツ言いながら自然な動作で部屋の扉を開ける。どうやら話をしている間に彼の部屋に辿り着いていたらしく、シルヴァーナははっ、とすると緊張に身を固めた。

「入って。適当に座っていい。……ああ、しまった、火を貰って来るのを忘れた」

ベンヴォーリオはテーブルに置いてあったキャンドルに火を灯そうとするが、火種を持っていない事に気付くと顔を顰める。

「面倒臭いな……。まあ月明かりもあるし、このままでもいいか」

「あ……わ、私貰って来ます……！」

「いいって。それより着替え手伝ってくれないか？」

「えっ……」

緊張から逃げる為に言ったのにあっさりと断られ、ベンヴォーリオは更に緊張を増すような事を言ってくる。

「あれ？これくらい出来ないようじゃこの先使用人としてやっていけないんじゃないか？」

「そんな……」

「じゃあ服を持っていてくれるだけでいい。それなら出来るだろう？」

やはり彼は自分には悪戯な笑顔しか見せる気はないらしい。シルヴァーナは溜息を吐くと渋々頷いた。

「……で、君はどうなんだ？」

「はい？」

「友達とか、いたのか？」

天蓋付きの広いベッドに驚きながら、そこに置かれた夜着を持ちベンヴォーリオの元へ戻ると、ボタンを外し始めていた彼が唐突に訊

ねて来る。

「ええと…、あまり歳の近い子は少なくて。遊んだりする子もいたのはいたんですけど、ベンヴォーリオ様達に比べるととも。親友と呼べるような子もいませんでした。それに母が病気になってからはずっと働きっぱなしで…」

たった三日、まだまだ鮮明に遊んでいた顔は思い出せるが、思えば誰も強い絆を感じる事は出来ない。ベンヴォーリオ達に比べると余りに人付き合いが希薄だったような気がして、シルヴァーナは苦笑を浮かべた。

「母親が亡くなったんだっけ？父親も？」

「はい…」

「そうか…、じゃあ本当に独りぼっちなんだな」

「っ……」

しかしその言葉に、シルヴァーナは急に胸を刺し抜かれたような気がして、一瞬息が止まる。自分で言うのとはまた違う重々しい響きが胸を押し潰し、酷く痛い。シルヴァーナは夜着で隠れた震える手をぎゅっと握った。

「…なら、俺の恋人になる？」

「——…え」

だがその時突然浮遊感に襲われ、驚く間もなく抱え上げられるとベッドまで連れて行かれ、ドサッと落とされる。

「?????!」

何が起こったか把握出来ず目を白黒させるシルヴァーナに、いつの間にか服を脱ぎ終え上半身裸になっていたベンヴォーリオは覆い被さると、月明かりに照らされた艶めいた笑みを浮かべ、手に手を絡ませて顔を寄せて来た。

「…こういう事は初めて？」

初めて会った時も間近に寄られたが、その時とは比べ物にならない程近い距離は息さえも容易に届く。

「……な…何も…しないって……」

混乱しながらもどうにかそれだけを絞り出すと、彼は鼻で笑う。

「無体はするなって言われたけど、何もしいとは言っていないだろう？」

「…！」

「こんな深夜に男の部屋について来るっていうのはそういう事だ。覚えておくと良い」

そう言ってシルヴァーナの額に一つキスを落とすと、それを皮切りに唇を除いた頬や脛にゆつくりとキスの雨が降って来る。

ずるいとか、これは無体じゃないのかとか、そちらが無理矢理連れて来たのではないかとか、色々な文句が頭を駆け巡ったが言葉にはならず、シルヴァーナはただ呆然とその傲慢な行為を受け入れるしかなかった。

「…俺の恋人になるかい？君なら別に構わないよ」

耳許で甘く囁かれ、ぴくりと身体が跳ねる。

「君の事は初めて会った時から気に入っていたんだ。俺の恋人になれば今よりは楽をさせてあげられるよ？」

ベンヴォーリオは上体を少し起こすと、今度は手の甲や指先に口付けて来る。

「こんなに若くて可愛いのに、土の匂いがするこの荒れた手だっすぐに綺麗にしてあげよう。そうしたら君の母上と父上だって、きっと安心してくれる」

「……………」

そうしてついに唇に顔を寄せて来るが、シルヴァーナはその寸前で手を振り解くと、思いつきり彼の身体を突き飛ばした。

「……………?!」

すっかり油断し切っていたベンヴォーリオは簡単に押し返されると、そのまま体勢を崩しどしん、とベッドの下に落ちると声を上げる。

「いつ…！何するんだっ、シル…っ——」

「…っ……………」

シルヴァーナはようやく解放された上体を起こすと、腰を押さえるベンヴォーリオをきつ、と睨みつけた。その瞳からはポロポロと涙が零れ、彼女の上氣して赤い頬を濡らして行く。

「シルヴァーナ…」

「……………ひどい…」

「っ……………」

伸ばされた手を撥ね付け、シルヴァーナは震える身体を両手で抱える。

「お母さんとお父さんの事……馬鹿にしないでっ……」

シルヴァーナは声を振り絞って叫ぶと顔を背ける。ベンヴォーリオの言葉は自分よりも両親を馬鹿にしているようで許せなかった。だって彼女は、情けを買ってまで幸せになれなんて言われていない。この土臭く荒れた手だって、この手があつたからこそここまで生きて来られたのだし、何より彼女の母の手はもつと酷く傷付いていた。こんな広い柔らかいベッドに大きなお屋敷、裕福に育った彼には分らないのだろうか。何もしないで手に入れられる本当の幸せなんてない事が。両親はどうにか手に入れた幸せでさえ、彼等みたいに争いを起こす人達によって無情にも奪われてしまったというのに。しかしシルヴァーナの頭は熱くなっていく一方、まだどこか冷静な片隅で、でも、とぼんやり思う。

あの時助けてくれた彼の優しさが嘘だったなんて思いたくない。友人の事を素直に好きだと言える彼の純粹さを疑いたくはなかった。疑ってしまったら、また独りぼちになってしまふ。孤独という寂しさの中で、一番最初に声を掛けてくれたのは確かに彼だったのだから。

「……」

——ああ、そうか、本当はずっと寂しかったんだ。

ようやく思い至り、シルヴァーナは益々溢れ出す涙を両手で覆う。思えば母が死んだ日以来、ろくに泣いていなかった。すっかりなくてはと思う余り、許される筈の当たり前の感情さえも押し込めて無理をしていた。本当は逝かないで、とお墓に泣いて縋りたかった。

本当は一人だけで慣れ親しんだ村を離れなくなかった。——独りぼつちに、なりたくなかった。

「お母…さん…っ…」

——どうして、私を置いて死んでしまったの？

「ごめん…、悪ふざけが過ぎた…。ほんの冗談のつもりだったのに…」

涙は堰を切ったように止まらない。シルヴァーナはベンヴォーリオを拒絶するように身を固くして踞ったまま嗚咽を漏らす、その頭に恐る恐るといった風に乗せられた手は何故か暖かった。

「本当に、ごめん…。シルヴァーナ…」

でも、この先どうやって彼の事を信じて行けば良いのだろう。今までの暮らしとは違いすぎる、余りに沢山の事を知り過ぎた一日。シルヴァーナの頭の中はもうぐちゃぐちゃで、何も考えられそうになかった。

それでも、自分の居場所はここにしかないのだから。

変調の兆し

——「つだけ約束して…シルヴァーナ。ヴェローナに行っても、あなただけは何色にも染まってはいけない。」

「——…お母…さん……？」

気持ちの良い柔らかい感触に包まれながら、シルヴァーナは薄らと目を開ける。ぼんやりと視線を動かして母親の姿を探すが、目の前に広がるのは母親どころか見知らぬ風景で、彼女はゆっくり瞬くと重い身体を持ち上げた。

「ここは…」

気怠い頭を押さえながら何度か視線を巡らし、広さや見事な調度品の数々からここが自分の家ではないと気付くと、シルヴァーナははっ、として飛び跳ねた。

「ベンヴォーリオ様の…！」

ここがどこで何故ここにいいのか、一瞬で全てを思い出し口を押さえると、慌てて辺りを見渡してこの部屋の主を探す。しかしその姿はどこにもなく、彼女一人だけがぽつんとベッドの上に残されていた。

「どうしよう…あのまま寝ちゃったんだ…」

昨夜ベンヴォーリオに酷い事を言われ、散々泣いた挙げ句どうやらそのまま泣き疲れて眠ってしまったらしいが、それは考える間でもなく酷い叱責物だった。たかか使用人如きが主人の親族に楯突き、挙げ句ベッドまで占領してしまった。

シルヴァーナは蒼白してぎゅっと膝元の布を握ったが、ふとした違和感に視線を下ろすと、その布——もとい上掛けを拾い上げた。

「これ……」

膝に引っ掛かっていたそれはどうやらシルヴァーナの身体に掛かっていた物らしく、それを掛けてくれたのは誰かと問われるとたった一人しか思い浮かばない。シルヴァーナは言葉を無くして呆然とするが、更にその横に一輪の白いマーガレットとメモを見付けるとそろそろと拾い上げた。

「……………」

まるで詫びる様に控え目に置かれた手詰みのマーガレットと、何か一言書かれたメモ。最初に会った時に文字は読めないと言った筈だが、忘れてしまったのだろうか。

「……覚えてる筈もないか……」

彼はきつとそんなに暇じゃない、とシルヴァーナは自嘲気味に苦笑するが、その悪戯な笑顔を思い出すと息苦しさにぎゅ、と花を胸に押し抱いた。

「ベンヴォーリオ様……………」

「…ひどい顔だねえ」

もう陽が大分高くなっている事によやく気付き、シルヴァーナが慌てふためいて取り敢えず謝りに厨房にいるアーニヤの元へ行くと、開口一番呆れたようにそう言われた。

「え…」

「その目、真っ赤じゃないか。あの方が借りて来た猫みたいに大人しくなつてた所を見れば、よっぽど酷い事をしでかしたんだねえ」

道理で先程から風が滲みる筈だと思いながらも、シルヴァーナはブラシ片手に溜息を吐くアーニヤの言葉に首を傾げた。

「ベンヴォーリオ様が…？」

「ん？ああ、朝早くあたしん所に来てね、自分の所為だから怒らないでやってってくれってさ。ベンヴォーリオ様の部屋にいたんだろう？寝かせておいてやってってくれって」

「…っ……」

シルヴァーナは無意識にマーガレットを持つ手に力を籠める。

「あんたも長旅やらなんやらで疲れてたんだろうさ、今日くらいは構わないよ」

「ごめんなさい…」

「いいから、取り敢えず着替えておいで」

苦笑気味に言われ、項垂れる彼女をアーニヤは腕を叩いて促す。

「怒りはしないけど、罰として今日は買い物に付き合っただけで貰うからね。重い物が沢山あるから覚悟しておくんだよ」

「はい。でもあの、その前にこのメモ読めますか？」

「メモ？」

「はい、起きたら置いてあった。ペンヴオーリオ様ですよ？」

急かされながらもこれだけは、と先程のメモを見せると、アーニヤはああ、と笑う。

「”昨夜はごめん”って書いてあるね。あと下はサインだね。しかし素っ気無いねえ」

「……………」

やはり昨夜の詫びなのだと、シルヴァーナはメモと花を見比べるが、またこんがらがっていく思考に情けなく眉を寄せると、ぽつりと呟いた。

「…ペンヴオーリオ様ってどういう方なのですか…？」

「シルヴァーナ…」

助けを求めて縋るようにアーニヤを見ると、彼女は目を大きくする。

「親切だと思ったら意地悪で、酷い事も平気で言うのにこんな風に優しくして…。私…何だかよく分からなくて…」

天の邪鬼とか子供っぽいとか、一言で言い表わすには彼は少し複雑過ぎるような気がする。どこか屈折したものも感じるのに、それと同じくらいこのマーガレットの様に純粋なものも持っている。

分からないなりに言葉にすると、アーニヤは暫し思案した後、ふう、と一息を吐いた。

「…そうさね、ロミオ様もだけど、この家の坊ちゃん方はいつの代も可哀相なのさ」

「可哀相…？」

「生まれた時からキャピュレットという敵がいて、まるで親が誰かを教えるように周りからそれをみつちり叩き込まれる。モンタギューとキャピュレットの子供達が最初に覚える言葉は”憎しみ”。…そんな風に言われる程にね」

「そんな…」

ここに来てもう幾度も聞いたモンタギューとキャピュレットという名。両親の事やベンヴォーリオの話から深刻な物だとは感じていたが、まさかそんな根底から植え付けられた物だったとは思わず、シルヴァーナは愕然とする。

「本人達もきつとどうしようもないんだと思うよ。大きくなれば自ずと世界は見えてくるものだけど、その頃にはもう目の前には闘いしかないんだから。そんな環境の中で、何が正しくて何が間違ってるのかなんて、何かよつぽどの事がなきゃ分からないもんさ…」

「……ベンヴォーリオ様…」

一歩外に出ればいるのは敵か味方だけ。一体それはどんな感覚なのだろうか。シルヴァーナはベンヴォーリオの胸中に思いを馳せる。

普通に生きていれば当たり前の様に他者に向けられる無償の愛に見極めが必要なのだとしたら、それは余りにも寂し過ぎるのではないか。そんな風に視界を塞がれれば、向けられる愛情は内側にしかない。屈折もする筈だ。

「あたしもこんなのは良くないと思ってるけどね、立場が立場だからこればかりはどうしようもないのさ。それよりさ、早く着替え

といで。買い物の前に午前中に掃除を終わらせなきゃならないんだからね」

アーニヤももう辟易しているのだろう、話は終わりだと言わんばかりにブラシを動かす手を再開すると、シルヴァーナをシツシツと厨房から追い出す。

話を聞いてスツキリする所か益々モヤモヤとしてしまったが、シルヴァーナは仕方なく踵を返すと、急ぎ足で着替えに向かった。

新入りなのに休んでしまった分を取り戻すように掃除に励み、その後昼食を摂り、街案内も兼ねてアーニヤに買い物に連れ出されたのは、丁度時計の針が昼を差した頃だった。今日もヴェローナは晴れて陽差しが眩しい。

「あつれ、ロミオンとこの喧しいおばさんじゃないか」

シルヴァーナが次からは一人でも買い物に行けるようアーニヤに道を教えて貰いながら歩いていると、ある一角に差し掛かった所で誰かがアーニヤに声を掛けて来た。彼女はそれが誰だか分かったようで、やれやれと肩を落とすと、嫌味な程の笑顔で振り返った。

「これはこれはマーキューシオ様。相変わらずお元気で。大公様もさぞお喜びでしょうねえ」

「伯父上は関係ないだろ！相変わらず意地悪なおばさんだなっ！あゝあ、あんたと言い今朝のおばさんと言い今日は煩いおばさんデード。ヤダヤダ」

マーキューシオ、とシルヴァーナは口の中で呟く。確か昨晚ベンヴ

オーリオが話していたもう一人の親友の名前がそうだった。ではこの彼がそうなのか、と頭で手を組む上背のあるその青年を眺める。手足が長く印象は優男と言った感じだが、その瞳の奥にはベンヴォーリオよりもずっと暗い炎が燦っているのが見える。

「まあでもこっちの子を紹介して貰えるなら少しはマシな日になるかもな」

彼もベンヴォーリオ達と同様に何か憎しみを植え付けられているのだろうか、とぼんやり思っている、突然その瞳がこちらに向けられて、するりと横に移動すると肩に腕を回して来た。

「見ない顔だけど新入り？中々可愛いじゃないか」

「えっ、あのっ…」

「俺はマーキューシオ。お宅のロミオの親友だ。もし昼飯がまだなら俺と一緒に行きこうぜ。あっ、ちなみに名前は？」

ベンヴォーリオと言いいこのマーキューシオと言いい、ヴェローナの男は腰が軽いのが基本なのだろうか、と本気で悩もうとした所で、今度は聞き覚えのある声がマーキューシオに向かって投げられた。

「マーキューシオ。何してるんだ？」

少し棘を含んだその声は今まさに色んな意味で悩んでいる相手の物で、シルヴァーナはどきつとすると顔を上げてその人物を恐る恐る見た。

「人ん家の使用人を勝手にからかうなよ」

「なんだよ、今更だろ？急に何怒ってるんだよベンヴォーリオ」

「別に怒ってない」

悉く青い服に身を包んだ数人の仲間を引き連れて、ぶすつとした様子でやって来たのは昨夜以来の再会となるベンヴォーリオで、ちらりとシルヴァーナを見たかと思うとすぐ気不味そうに顔を逸らした。

「ほら、放してやれよ」

「なんだよーつまんないなつ。あつ、ロミオが消えちまったから機嫌悪いんだろ？お前本当にロミオが好きだな」

「うるさいな、そんなんじゃない。アーニヤも。買い物か何かの途中だろう？早く行けよ」

「分かってますよ。ほら行くよ」

不機嫌なまま言われ、アーニヤは腫れ物には触らないといった風にあつさり承知すると、ベンヴォーリオに意識を捕らわれているシルヴァーナの腕をぐいっつと引つ張った。

「あつ……」

ぐいぐいと引つ張られ歩き出しながらもベンヴォーリオを振り返ると、彼は少し困ったような罰悪いような、複雑な笑みを浮かべていた。

「ベンヴォーリオ様……」

花のお礼も昨夜の詫びも何一つまだ出来ていない事に多少の歯痒さを感じながらも、シルヴァーナは遠ざかって行くその笑みからいつまでも目を離せないでいた。

「ちょっと待ってておくれね」

「はい」

その後改めて買い物再開し、教会がある広場に着くと、アーニヤは買った物をシルヴァーナに預けて粉屋に入って行く。先程も塩を買ったし本当に重い物ばかり買うのだと不安になるが、彼女はふと教会の方を見るとその違和感に気付いて目を丸くした。教会に集まる数人の人々は何故か中には入らず、細長い窓から一心に教会の中を見つめ、何かをこそそそと話している。

「…何、してるのかしら？」

中で何か行われているのか、シルヴァーナは不思議に思い、よれよれと荷物を抱えながらも少しだけ、とそちらへ向かって、人の後ろから中を覗いた。

「――…ロミオ…様…？」

硝子の向こう、神父が立つ祭壇の前には、昨日出掛けて以来見掛けなかったロミオが跪いている。今一方、その横に同じく跪く少女がいる。赤いドレスを来たシルヴァーナと同じ年頃に見えるその少女は、横顔だけでも天使の様に可憐で美しく、甘やかな雰囲気のロミオと並ぶ姿は一枚の絵のように美しい。

二人は恋人同士なのだろう。ひっそりとしているがまるで結婚式を挙げているような体裁で、輝く瞳にお互いしか写さず、幸せそうに笑い合い抱き合ってキスを交わす。

「綺麗……」

争いが目を奪うこの街にあっても、この夢のような愛に溢れた空間

はひたすらに神秘的で美しく、シルヴァーナは思わず感嘆の息を漏らし、その光景に釘付けになった。

けれどその間にも周りでは確かに困惑と噂が広がり、それがやがて街中に不審と更なる争いの影を落とそうとしている事を、このヴェローナに来たばかりの彼女はまだ知る筈もなかった。

青い空を照らしていた太陽は、いつの間にか薄らと雲を纏っていた。

ヴェローナの暮れ

その純粋な愛の儀式は少女に夢を与え、周囲には衝撃を与える。本来なら歓迎され、祝福される筈の愛の誓いは今や騒乱の風となり、ヴェローナ中を瞬く間に吹き抜ける。

何故、とシルヴァーナは哀しみに瞳を伏せる。アーニヤに強く引つ張られながら、滲む世界が一気に冷たく無情な物に思え、彼女は抱えた重い荷物に顔を埋めた。

粉袋を抱えて戻って来た時の優しいアーニヤの顔は、あの儀式を見た後からずっと険しいままで、今は足早に屋敷への道を急いでいる。

——キャピュレットの娘とモンタギューの息子だ……。

——まさか、ありえない……。

驚愕と困惑に満ちた声が蘇る。夢に浸っていたシルヴァーナを現実に取り戻したのは、そんな周囲の憤りの声だった。口汚く罵る者、目を擦り何度も確認する者、落胆したように肩を落とす者、噂を広げに走る者。共通するのはその場の誰一人としてそれを祝福していないという事。キャピュレットと聞いた時に、何がいけないのかはもう彼女も分かっていたけれど、それでもこんなに理不尽な事は無い。教会の中の二人は両家の憎しみ等微塵も感じさせず、本当にただ幸せそうに笑っていたのに、その外ではまた争いが生まれようとしている。きつとこんな世界だからこそ、恋人達はこんなひっそりとした形で愛を誓い合っているのだ。

そして、こんな世界に両親は幸せを奪われた。

「お前！その服モンタギュー家の人間だな？！」
「っ…?!」

その時、横から誰かに強く二の腕を掴まれ、シルヴァーナは痛みに顔を歪める。彼女の手を引いていたアーニヤもつんのめって、怪訝そうに振り返るとひゃっ、と声を上げた。

「ロミオはどこだ！言え！！」

それは真っ赤な服を来た若い男だった。周りの視線等気にも留めず、物凄い剣幕でシルヴァーナに詰め寄る男は、有無を言わさない威圧感を与える。そのぎらぎらと燃えたぎった苛烈な瞳に恐怖を覚えたシルヴァーナは、腰を引いたまま石を飲み込んでしまったかのように動けなくなってしまった。

「おい！ロミオはどこだと聞いている！隠し立てするつもりなら容赦しないぞ！」

男は苛立った様子で、そのまま彼女の細腕を握り潰してしまいそうな勢いで更に力を籠める。堪らずシルヴァーナが苦悶の声を上げた時、見兼ねたアーニヤが視界に割り込んで来た。

「ちよいと！お止め下さいましよ！あたしらはただの買い物帰りで、今朝以来ロミオ様にはとんとお目に掛かってませんよ」

「本当だろうな？」

「神様に誓って嘘は吐きませんとも。だからその無慈悲な手を放してやってくださいな」

「神に誓うだとかそつ、どいつもこいつも胸くそ悪い。おい！行くぞ！」

忌々しげに吐き出すと、男は乱暴にシルヴァーナの腕を振り解き、仲間と思われる若者を引き連れて行く。ようやく解放されても少しも安心しきれず、呆然と立ち尽くすシルヴァーナにアーニヤはひどく心配そうに近寄ると、荷物を奪って地面に置き、震える腕を撫でてくれた。

「シルヴァーナっ…大丈夫かい？」

「…は、はい……」

「あれはティボルトだよ。キャピュレットのリーダーだ。いつも何か騒ぎを起こしてる」

「キャピュレットの…。でも…ロミオ様の居場所の事…」

「もう知らないのは本当さ。例え知っててもあんな獣の眼をした人間に教えるものかい。何をされるか分からない。争いを避ける為なら神様も多少の嘘は許してくれるよ。それにしても全く酷い事をするねえ、痕にならないといいけど…」

何度も撫でられてようやく震えが収まった腕を押さえ、シルヴァーナは男達が去って行った方を見る。闘争心に溢れたあの瞳、この街に吹くどこか血生臭い風、両家の埋めようのない確執。そして、あの誓いの場にいなかったベンヴォーリオを始めたロミオの友人達。彼女の胸は何か嫌な予感にざわめいていた。

何も起きなければ良い、と願う。シルヴァーナはもうこれ以上、自分が生きて行くこの世界を悲観したくはなかった。

しかしそんな彼女の願いも虚しく起こってしまったある事件は、ヴェローナ中を衝撃の渦に巻き込む。

ロミオとジュリエットという――アーニヤが名前を覚えてくれた――キャピュレット卿の一人娘との結婚式をシルヴァーナと共に目撃

してしまったアーニヤは、先程一時はいつもの優しさに戻ってくれたと思つたが、もう再び険しい顔になつて何かを考え込んでいる。それでも手許は危なげなく、黙々と買つて来た食材を見事に刻んでいるのは流石と言つた所か。シルヴァーナはまだ痛む二の腕を堪えながら黙つてそれを手伝うが、バタバタと大きな足音が近付いて来るのに気付くと、流石に二人揃つて顔を上げた。

「アーニヤ！大変だよ！」

ばたん、とこれまた大きな音を立てて、昨日よりも随分増した勢いで厨房に入つて来た使用人仲間の一人が、息を切らしながら目を丸くするアーニヤの肩に手を置いて縋り付く。

「なんだ！騒々しいね」

「だって…だつてついにやつちまつたんだよ…」

「やつちまつた？何をだい？落ち着いて話してごらん」

「復讐だよ！復讐！ロミオ様が…ロミオ様がキャピュレットのティボルトに復讐した！」

「……………」

アーニヤは目を見開き、シルヴァーナは持っていたボウルを取り落とした。がこん、とした固い音と散らばる食材にはつとして、ようやく少し冷静さを取り戻したその使用人は、額を押さえながら手近にあつた椅子に項垂れて腰掛けた。

「ああ…何から説明したらいいんだろう…！とにかくあたしは驚いて飛んで帰つて来たから、まだ整理が着かないんだよ…あんだ達はロミオ様とキャピュレットの娘が結婚式を挙げていたらしい事は知ってるかい？」

「…ああ、この目で見たさね」

アーニヤはぎゅつと眉間を寄せて瞑目するが、同時に劣る様にその使用人の背を撫でる。

「そう…それで怒ったティボルトとあのお友達の方…マーキューシオ様が決闘になって、ティボルトがマーキューシオ様を殺した」

「っ……」

シルヴァーナは胸を貫いた痛みに息を飲む。どくんどく、と心音が早まって行くのが分かる。

「……ベン…ヴォーリオ様…は…？」

そして無意識に口をついて出た名前に、彼女は自分でも驚いた。しかし周りの二人も同じく驚き、戸惑いを見せ目を見交わすと、不審そうにしながらも答えてくれた。

「その場には居合わせたらしいけどベンヴォーリオ様は無事さ…、安心おし。でも、ロミオ様がティボルトに復讐した。仇を取ったんだ。…今大様がお出ましになっているらしい。ロミオ様はきつと処刑される…」

「まさか…！」

シルヴァーナが思わず声を上げると、アーニヤは力なく首を振った。

「復讐は罪だ。私闘だって今まではお目溢しを貰っていたが、今度ばかりはもうそうはいかないだろう…」

「そんな…だって…」

シルヴァーナは信じられない、と愕然とする。だってロミオは笑っ

ていなかったか。ただ幸せそうに、愛する人だけを瞳に写して、闘い等無縁の世界で確かにあの時。

「嫌な考えが当たっちゃった…！それも最悪な…！」

アーニヤもテーブルにどん、と手を付くと肩を震わせる。シルヴァーナは立ち尽くしたまま、また震え出す手を握った。

「これから一体どうなるんだろう…、ロミオ様がいなくなったらこの家は…。キャピュレットだって跡取りのティボルトがいなくなったら…」

「馬鹿、今はそんなのが問題じゃないよ。これは今までの悪習が積み重なった結果だ…。子供達だけが悪いんじゃない、あたし達大人が反省しなきゃ…」

言ってアーニヤは不意にシルヴァーナを見ると、ぎゅっと抱き締める。

「今までだって死人が出なかった訳じゃない…」

「…！」

「あたし達は…その度に気付かなきゃいけなかったんだよ」

じわりと視界が滲む。この世界にまた恋人達が引き裂かれる。そう思うと、胸が苦しくて仕方なかった。

もし本当にロミオが処刑されたら、ジュリエットはどうなってしまうのだろう。母は父が殺された時、一体何を思ったのだろう。愛する人と離される事、本当に嘆くだけで済むのだろうか。シルヴァーナは知っている。残される者の量り知れない悲しみを。

「——…ベンヴォーリオ…様………」

「え…？」

そしてもう一人、残される者を彼女は知っている。親友を失い、今また失おうとしている青年がいる事を。

「シルヴァーナ…あんだ……」

アーニヤの呟きは、涙を零す彼女の耳にはもう届いていなかった。

残された二人

その日の夜、憔悴した様子のモンタギュー夫妻に付き添うようにして帰って来たベンヴォーリオは、迎えに出たシルヴァーナ達を一瞥もしなかった。すっかり疲れ切った表情でむっつりと黙りこくり、夫妻を部屋に送り届けると自身もそのまま自室に閉じ籠ってしまい、そのまま今に至るも出て来る気配は無い。

シルヴァーナ達は既に他の者達からロミオが処刑を免れ、ヴェローナからの永久追放で済んだ事を聞いて一先ず胸を撫で下ろしていたが、それはもうヴェローナでは二度とロミオに会う事は叶わないという意味で、庶民と違いこの地を息子と共に離れられない夫妻にとつてはやはり不幸に違いないだろう。そして、それは最後の夜だというのに一人屋敷に戻っていない当のロミオにとつても。

「お食事、摂って下さるかね…」

厨房の中、アーニヤは皿にスープを注ぎながら呟く。

「奥様は駄目だよ、すっかり参ってもうお休みになっっているから…」

「そうか…、旦那様でさえ余り召し上がって下さらなかったからね…。じゃあ後はベンヴォーリオ様が…」

アーニヤが溜息を吐きながらパンの添えられた銀のトレーにスープ皿を置くのを、厨房の片隅でぼんやりと眺めていたシルヴァーナは、ベンヴォーリオの名前にぴくりと反応するとおずおずと声を掛けた。

「あの…アーニヤさん…」

「ん？」

「ベンヴォーリオ様のお食事、私に運ばせていただけませんか…？」

「シルヴァーナ…」

アーニヤは驚いたような表情を浮かべ、次に何やら渋い顔をしたが、トレーを差し出してくれる。

「じゃあ、頼んだよ…」

「ありがとうございます」

しかしトレーに手を掛けてもアーニヤは放さず、シルヴァーナはきよとんとする。

「アーニヤさん？」

「シルヴァーナ…、一つだけ、いいかい…？」

「…？はい」

彼女はどこか深刻そうな顔でシルヴァーナを見る。

「あたし達はただの使用人だからね…。それを、忘れちゃいけないよ」

ゆっくりと言い含めるような口調だったが、シルヴァーナはその真意を量り取れず小首を傾げると、素直に頷いた。

「勿論、当たり前じゃないですか。まだたった二日でそんな事忘れませんよ」

「そうかい…？ならいいんだ…」

彼女が一体何故そんな風に肩を落として残念そうに笑うのか、シルヴァーナにはよく分からなかった。

月も星も昨日とはさして変わらないのに、しん、とした夜の空気だけは随分と重い。

シルヴァーナはベンヴォーリオの部屋の前に立ち、暫しどう声を掛けるか迷った後、意を決して扉を叩く。昨夜は連れて来られた彼の部屋に、今夜は自ら訪れている。緊張するのはやはり変わらないが、今は昨夜とはまた違った緊張感が彼女を包んでいた。

「…ベンヴォーリオ様、お食事をお持ちしました」

「……………」

「ベンヴォーリオ様？」

数回コンコンと叩きながら声を掛けるが、中からは何の返事も音も返って来ない。寝るにはまだ早い時刻の筈だが、もう疲れて眠ってしまっているのだろうか。ドアノブにそっと手を掛けてみると、鍵は掛かっていないようで、シルヴァーナはそっと開くと中を覗いた。

「…勝手に開けるなよ」

「っ……………」

しかし覗き込んだと同時に暗い室内から声がして、シルヴァーナは驚いて片手に乗せていたトレーを落としそうになった。乗せていたスプーンが少し零れる音がして、一緒に乗せていたキャンドルまで倒れそうになって、彼女は慌てて手を添える。

「……何やつてるんだ……」

次に聞こえた溜息混じりの呆れたような声は、いつもとそう変わらないように感じて、シルヴァーナは少しほっとするとお尻で押さえていた扉を身体で押さえ直した。

「すみません……」

「……………」

「スूप、少し零してしまったので新しいのをご用意して来ますね……」

しかし今度はちゃんと両手でトレーを持ったが、零れてしまったスूपは戻しようがなく、頭を下げて一旦部屋を後にしようとしたが、ベンヴォーリオはそれを拒んだ。

「いい。どうせ食欲なんかないんだ……」

「ベンヴォーリオ様……。でもお身体に……」

「いって言うてるだろ。持って帰るならもうそのまま二度と持って来ないでくれ」

投げ遣りに言われ、シルヴァーナは出て行くのを止めると、ようやく初めてキャンドルの灯でベンヴォーリオを照らした。いつからそうしていたのか、ジャケツトも脱がず帰って来た時の服装のままベッドに座り込み、肩を落とす彼は昨日までの元気さは微塵もなく、心底参っている様子だった。シルヴァーナは部屋の扉を閉めると、中に進んでテーブルの上にトレーを置く。幸い今度は拒まれなかった。

「怪我を……なさっています……」

傍に寄ると、顔に小さな傷や人を殴った跡の様な拳の傷に気が付き、そつと触れると、ベンヴォーリオはびくつと顔を歪めて手を払う。

「いつ……やめろよっ」

「でも手当を……」

「……これくらいどうって事ない……」

「ベンヴォーリオ様……」

くいつと口許を親指で拭うその袖に、明らかに彼の物では無い血の滲みを見付け、シルヴァーナは眉根を寄せる。ずきり、とまた胸が痛んだが、自分まで飲まれてはいけないと小さく頭を振ると、一先ず手当は諦めて、項垂れる彼に極力明るめに話題を振り替えた。

「今日くらいご自分のお屋敷にお帰りにならなくてもいいのですか？」

「……帰ってもロミオはいない……」

「……っ……」

しかし返って来た返事はお互いを辛くさせただけで、シルヴァーナは困って口を嚙む。対してベンヴォーリオは力無く笑うと、髪を掻き上げた。

「いや、ここに帰って来てもロミオはいないか……」

「……ロミオ様はもう……？」

「今夜中は猶予を与えられている。……きっと、ジュリエットの所だ……」

「そうでしたか……」

だからロミオは帰っていないのか、とシルヴァーナは一人納得する。心情を思えば哀しいだけかもしれないが、最後の夜になるなら愛す

る人と一緒にいたいと思うのは当然だろう。

「…でも、処刑は免れて…本当に良かったです…」

せめてもの救いはロミオまでも殺される事なく、少なくともヴェローナ以外では生きて行けるという事だろうか。なのにベンヴオーリオは首を振ると両手で顔を押さえる。

「でも…俺はもう一人だ…」

「…ロミオ様は生きてらっしゃいます」

「それでももうこのヴェローナでは会えない…。マーキューシオだつて…死んでしまった…！」

ベンヴオーリオは憤りを吐き出すように肩を怒らす。

「昨日まではこんな事になるなんて思いもしなかった…！ただ毎日三人で馬鹿をやっていたればそれで楽しかったのに、たった一日きりで全て崩れてしまった！ティボルトだつて、奴が大嫌いだったけど、死んで欲しいとまでは思つてなかった…！」

「ベンヴオーリオ様…」

「どうして俺はあの時もつと必死にマーキューシオを止めなかった？！…どうしてロミオを止められなかったんだ？！」

ベンヴオーリオは顔を上げると、肩に添えようとしていたシルヴァーナの手を反対に掴んで、泣いてしまいそうな瞳で縋るように見上げてくる。

「なあ、今までの罰が当たったんだろうか？ロミオが言っていたんだ…、同じ人間同士憎しみあうのは止めるつて。人は自由に生きるものだ。ロミオはキャピュレットの娘を愛した、彼女への愛に生

きると言った。闘う事しか知らなかった俺達が愚かだったから神様はこんな罰を下したのか…?!」

涙を堪えているように見えるのに、感情が爆発したかのように口を挟む隙もなく一気に吐き出すと、肩で息をしながらベンヴォーリオはくつと口角を上げ、自嘲するように痛々しく笑う。

「何にしろ俺はもう独りだ。君と同じだ。ざまあみろとも思っているだろう。昨日の罰だと」

「そんな…」

「そうだ、これからは独り者同士本当に仲良くしようか？ロミオの言う通り同じ人間同士、身分なんてのも関係ないんだ」

そしてそう言うや否やぐいつ、と強く手を引っ張られ、シルヴァーナは簡単に膝を折られると、ベンヴォーリオの腕の中に閉じ込められてしまった。

「ベンヴォーリオ様っ…」

「馬鹿だな…、昨日も言っただじゃないか。夜に男の部屋に来るなっ
て」

ぎゅう、と抱き締められ、くぐもった声で囁きながら首筋に唇を這わせられ、シルヴァーナはぞくつと身を縮める。昨夜とは違いどう見てもベンヴォーリオは自棄を起こしてるとしか思えなかったが、どうしてまたこんな形でしかそれを表現出来ないのかと、シルヴァーナは哀しくなる。あの花は、あの短い手紙は一体何だったと彼は言うつもりなのだろう。もう少し信じたい、周りの環境の所為で不器用なだけなのだと思いたかったのに、その矢先にまたこうしてそれを裏切ろうとする。マールキューシオの死やロミオの言葉から学んだ事が本当にこんな事だというのなら、余りにも愚か過ぎる。

「っ…！いい加減に…して下さい！」

シルヴァーナは耐え切れなくなり、怒気も露にベンヴォーリオを押し退けると、床に座ったまま距離を取り彼を睨み付けた。

「独り独りって…ロミオ様は生きてらっしゃるじゃないですか！たかだかもうヴェローナで会えなくなるだけの事でしょう？家族だつて、ベンヴォーリオ様にはまだいらっしゃるじゃないですか…！私は本当にもう誰もいないのに…！」

「っ…」

自分が傷付くだけだから不幸比べなんてしたくも無いが、止まらない。あれだけ好いていた様子の友人の死は確かに身を切られるように辛いだろうが、まだ全ての希望が絶たれた訳ではないのに、一人で絶望し切っているその姿が情けなかった。

「そもそも貴方達という闘いだって…神様が罰を下すまでもなく私は最初から間違っていると思っていました。どうして父はそんな事で死ななきゃならなかったんだろうって」

「……え…？」

ついに今迄心にだけ留めていた事まで口をついて出る。

「母は…どうしてそんな事で幸せを奪われなきゃならなかったんです？」

「シルヴァーナ…？」

それは昔の事で、彼に直接関わりはないのに、その後に続くモンタギューというだけで恨み言のようにぶつけようとしている。目を見

開いて困惑しているベンヴォーリオをまともに見ていられず、シルヴァーナは目を逸らして顔を俯けると、震える声で搾り出した。

「父は、私が産まれる前にこのヴェローナで死にました…。モンタギューとキャピュレットの争いに巻き込まれて…母を一人残して…」

「……」

「私は…両親やロミオ様達のような人達を出してしまうこの争いが嫌いです…。こんな風にベンヴォーリオ様達を苦しめるこの争いが大嫌いです…！」

——ヴェローナに行っても、あなただけでは何色にも染まっではない。

今ならその言葉の意味が痛い程よく分かる。飾りでしかない名前に振り回され、ましてや命を落とすなんて、あつてはならない。

「だから私は…せめてベンヴォーリオ様が無事で安心したのに…」

「——シルヴァーナ…君は……」

「っ」

戸惑った声音で頬に伸ばされた手をシルヴァーナははっ、として身を引いて避けると、きゅつと唇を引き結んで覚束無い足取りで立ち上がった。

「すみません…今夜はもう失礼します…。少し…熱くなり過ぎました…」

「シルヴァーナっ……」

「お食事…せめて一口だけでも召し上がって下さいね…」

そして顔を背けたまま踵を返すと、もう本当にベンヴォーリオを一瞥も出来ず、ふらふらとそのまま部屋を後にする。これ以上ここに彼の顔を見ていると、また泣いてしまいそうで嫌だった。

「——くそっ…!」

その扉を閉める瞬間、背後ではそんなベンヴォーリオの声がした。

ロミオとジュリエット

世の中というのはどうしてこんなにも上手く行かないものなのだろうか。早朝、ヒバリの鳴声と共に起床したシルヴァーナは、そんな事を思いながら今日も青い服に袖を通す。彼女が寝泊まりする地下の共同の使用人部屋は、ベッド周りの僅かなスペースがその人の荷物置き場となり、そこで着替えて仕事に出て行けば、後はほとんど就寝の刻まで戻る事はない。けれど彼女はそこに一輪の花を飾った机も花瓶もないから、家から持ち出していた無骨な木のコップに差して、唯一の荷物である古びたトランクの上に置いて。

シルヴァーナは先に出て行く他の使用人達を横目に、物憂げにそつとその白いマーガレットを見つめた。マーガレットは窓もない窮屈なこの部屋でも、ぱつと陽の光が射し込んだ様に周りを明るくしてくれる花だが、これを送ってくれた人はきつと今は暗い洞窟の中にいる。昨夜はどうにか少しでも励ましたくてその人の元に行った筈なのに、気付いた時には自分の感情ばかりぶつけていた。思えば一昨日の晩も同じように感情を爆発させてしまったから、反省がないのはこちらと同じだった。泣いて、謝れず、またぶつかって、そして反省する。どうにも煮え切れない状態が続いていた。

しかしそんな時でも仕事は無くなる訳も無く、シルヴァーナは朝食の準備の為に厨房に向かった。

「ロミオ様は今どの辺りかねえ……」

朝食用のパン生地を丸めながらアーニヤがぼつりと呟く。ロミオ達が生まれる前からモンタギュー家で働く彼女は、当然赤ん坊の頃から

らロミオ達の事を見て来たから母親のような気持ちもあるらしく、
たった一人ヴェローナを離れる羽目になってしまったロミオの事を
心配し、悲しんでいた。シルヴァーナがここに来てまだたったの二
日しか経っていないが、屋敷の中も目に見えて活気が無く、どの使
用人達の顔にも笑顔は無かった。

「……………」

そう、まだたった二日しか経っていない。鬱々と竈の火を起こしな
がらふとそれに思い当たると、シルヴァーナは苦い思いで窓の外を
見た。まだ鮮明に思い出せるヴェローナの最初の空と、窓の向こう
に広がる今朝でまだ三度目のそれは、まだまだ同じ色をしている。
このたった二日の間に何て様々な事が起こったのだろう、と彼女は
透き通る朝陽に目を細めた。もう本当にこれ以上何も起こらなけれ
ばいい、と思うが、どこかさわさわと落ち着かない心が彼女を不安
にさせる。それはその後、アーニヤの使いで外に出た時も変わらな
かった。

「毎度あり」

あの教会があつた広場にある靴屋に、開店一番修理に出していた数
足の使用人の靴を受け取りに行ったシルヴァーナは、箱を抱えなが
ら屋敷への道を戻っていたが、昨日も足を止めたある一角に差し掛
かった時思わず顔を顰めた。目線の先では青い服と赤い服の若者達
が何か口論をしており、今にも掴み掛からんとする勢いで対峙して
いた。大体青い服を着た者はモンタギュー派で、赤い服がキャピュ
レット派の人間だという事にもう気付いていた彼女は、嫌悪感に疼
いた胸を押さえると、顔を背けて走り出した。何も起こらなければ
いい、といくらシルヴァーナが願った所で、それは所詮第三者の勝
手な願望で、当事者達が本当に悔い改めなければ何の価値も持たな

い。彼等は一体あと何人犠牲を出せばそれが愚かな事だと気付くのだろうか。

「——きゃっ……！」

「っ……?!」

街中に充満するピリピリとした空気を吸う度に痛む胸を押さえながらシルヴァーナは走ったが、角を曲がった所で急に人が視界に入ってきて、彼女は驚いて慌てて足を止めた。しかし完全には止め切れず、地面に足を引っかけるとこけそうな体勢で相手に申し掛かり、相手が足を踏ん張ってくれたのと、シルヴァーナがせめて荷物を捨て相手の腕を掴んで完全にぶつかるとを阻止したお陰で、お互い尻餅を着いてしまう事もなく何とか無理な体勢を強いられるだけで済んだ。

「……ごめんなさい！」

「い、いいえ……大丈夫ですか？」

「はい、本当にごめんなさい！」

お互い我に返ってあたふたと離れながら散らばった靴を拾うが、最後の一足を拾おうとしてお互いの指が重なり、はっとして顔を見合わせた。

「……—」

その時にシルヴァーナは初めて相手の顔をまともに見たが、しかしその途端言葉を失って目を見開く。頭に被ったマントのフードからさらりと一束流れ落ちたウェーブの金髪に、不思議そうに見て来る大きな瞳と艶やかな赤い唇。それは正に昨日見た夢の光景に出て来た少女だった。シルヴァーナは驚いてぽかんと暫し眺めてしまうが、

少女は時間を気にする様にまだ低い太陽を見遣ると、もどかしそうに身じろぎしてその最後の一足をシルヴァーナに渡すと、立ち上がって頭を下げた。

「ごめんなさい…！私急いでいるのでこれで失礼しますね…！」
「……あつ……！」

シルヴァーナは振り返ってジュリエット、と呼びそうになったが、そそくさと駆けて行くその後ろ姿を見て喉まで出掛かった声を飲み込んだ。慌てた様子とどこか思い詰めた表情は、教会で見た可憐で天使のような雰囲気は薄く、よっぽどロミオと離れ離れになったのが辛いのだろつと感じさせる。しかし昨日の今日で、こんな朝からに彼女は一体どこに向かおうとしているのか。シルヴァーナは何故か妙に気になって、暫くその場を離れられなかった。

「街の空気が悪い？」

屋敷に戻ったシルヴァーナはジュリエットの事は一先ず、街の様子をアーニヤに話す。

「はい…、何だか皆ピリピリしていて、些細な事でも簡単に火が点いてしまいそうな勢いで…。先刻もモンタギューの人達とキャピュレットの人達が言い争っていたし…」

「…無理もないさね。ロミオ様とマーキュシオ様、それにティボルト、お互いのリーダーが一気に三人もいなくなつちまつたんだ。そりゃあ秩序も乱れるだろうさ。それでもまだベンヴォーリオ様がいるから多少は抑えられるのかもしれないけど、それもたつた一人じゃ限界があるだろうね…」

「ベンヴォーリオ様が…」

「マールキューシオ様の喪に服す間もなく、あんたが使いに行ってる間にもお仲間の一人に呼ばれて行っちゃったよ。やれやれ…若い連中は本当に懲りないもんだよ…」

アーニヤは溜息を吐き、腰に手を当てると窓の外を遠い目で見る。

「全く…昨日から騒がしくて仕様がな。ねえシルヴァーナ…、この街には一体何が起こってるんだろうね…」

「アーニヤさん…」

シルヴァーナはアーニヤのこの問いには答えられなかったが、この日が過ぎない内にも、今このヴェローナに起こっている異変の更なる不幸を目の当たりにする事になった。

「ジュリエットさんが…?!」

シルヴァーナは口許を抑えると、身震いする。

——ジュリエットが毒を飲んで自殺した。

その日の夜、モンタギュー家にそれを伝えに来たのはベンヴォーリオ達の仲間の青年だった。ベンヴォーリオはロミオにその事を伝える為にヴェローナを出たから、今夜は戻らないとの事だった。

シルヴァーナは対応したアーニヤからそれを聞き、へたりと床に座り込む。

「そんな…どうして…」

「シルヴァーナ…」

「だって…、私今朝会ったんです…ジュリエットさんに偶然…」

あの時、確かにジュリエットの様子はおかしかったけれど。

「昨日だって…。アーニャさんも見たでしょう…？あんなに幸せそうだったのに…どうしてこんな…！」

遣り切れない気持ちに半ば叫ぶように言うと、シルヴァーナは顔を両手で覆う。直前に出会った同じ年頃の少女が自殺したという事もショックだったし、それ程の強い愛がこんな形で潰えてしまった事が何よりも哀しかった。

この世界は後どれだけの不幸を喰らえば満足するのだろうか。一人、また一人とその魔手に掛けて、やがてその手はシルヴァーナにも伸びて来るかも知れない。否、それよりも優しいアーニャやこれから絶望に打ちひしがれるだろうロミオ達がそんな目に遭うかも知れないのが怖かった。そして、いつかは自分勝手に意地悪なのに、優しいベンヴォーリオまでも。

「っ——…」

もう本当に、これ以上二度と何も起こらないで欲しい。もう何度目か分からないが、初めて強く、強く願う。街に、人に、自分自身に付き纏う死の匂いはどうすれば晴れるのだろうか。シルヴァーナは、こんな風に祈る事しか出来ない自分が悔しかった。

そして、世界はまたそんな少女の願いを裏切る。ロミオとジュリエット、愛し合う二人の儚い死によって。

けれど健気なその愛の死は、長年に渡るモンタギューとキャピュレット両家の争いに終止符を打ち、ついに和解をもたらした。その代償に払った犠牲は余りにも大きかったが、人々はようやく過ちに気付き、お互いを認め合えたのだった。

ヴェローナを吹き抜ける風は、もはや死の匂いはしなかった。

愛の行方

ヴェローナを吹き抜ける風は、もはや死の匂いはしない。一組の恋人によって人々の上に射し始めた光は未来を照らし、同時に哀しみも静かに降り注ぐ。

その空の下、風の中を彼女は走っていた。膝許で翻り、纏わりつく白いワンピースに度々足を取られそうになりながらも、必死で辺りを見渡しながらその人の姿を探す。

——あの人の傍にいかなくては。
胸にあるのはただその想いだけ。

「ベンヴォーリオ様……」

——どうか、一人だけで哀しまないで…。

シルヴァーナがそれを聞いたのは朝起きてすぐの事だった。着替えでアーニヤの元に行くと、一睡もしていない様子の彼女から、昨夜遅くキャピュレット家の霊廟で起こってしまった悲劇を聞かされた。曰くロミオとジュリエットが共に死んで、そしてそれをきっかけにモンタギューとキャピュレットが遂に和解したとも。シルヴァーナはただ呆然として、それでも言葉を探し、考え倦ねる。遂にロミオまでも死んで、本当は死んでいなかったジュリエットも後を追った。そして憎むべき争いの根源が解消され、残された者達はようやく手を取り合った。シルヴァーナは確かにそれを望んでいたが、その為

に払われた最後の犠牲は余りにも大きい。そして残された者達の哀しみもまた量り知れない程大きいだろう。

しかし彼女は、不意にその中に一人の姿を見る。ベッドの上で肩を落とし、絶望し切って背を丸めていた彼は、今はどこで背を丸めているのだろうか。ロミオに会いに行ったマントヴァから戻るとモンタギュー夫妻と霊廟に向かったと言うが、それから一晩まだ屋敷には戻っていないらしい。

「……」

彼はロミオと一緒にには戻れなかったのだ。戻れたなら、ロミオが死ぬ事を許す筈がない。彼は誰よりも他ならぬロミオを慕っていたのだから。

「……行かないや……」

「え……？」

シルヴァーナはぼそりと呟き、いてもたってもいられず部屋を飛び出す。

「シルヴァーナ！」

だが、部屋を飛び出したすぐ後ろからアーニヤに手首を掴まされると、シルヴァーナはもどかしく振り返る。

「アーニヤさんっ……！」

「分かってるよ。ベンヴォーリオ様を探しに行くつもりだろう？」

「っ……」

冷静な瞳にあっさり見透かされ、シルヴァーナは口を噤む。

「この間言わなかったかい？あたし達はただの使用人だと…」

彼女は咎める調子ではないが、シルヴァーナは早る想いに急かされる様に、掴まれているアーニヤの手に手を掛け、放してくれと押し返す。新入りの身で職場を投げ出すなんて叱責を受けて当然だが、今はそれを聞いている時間さえ惜しい。

「お叱りは後で幾らでも受けます。どんな罰でもちゃんと受けますから、お願いです…！今だけは行かせて下さい…」

「馬鹿、そんな事を言ってるんじゃないよ。あたしが言ってるのは、これ以上深入りするなって事だよ。あの方とあたし達じゃ身分が違う。何かあった時、傷付くのはあんだんだよ？」

シルヴァーナははっ、として目を見開くと、もがくのを止める。アーニヤの言葉の意味をようやく理解し、戸惑いに瞳を揺らした。

「あたしはあなたにアドリアーナのような悲しい思いはして欲しくない。あなたには平凡な幸せを掴んで欲しいんだよ」

「アーニヤさん…」

掴んでいた手の力を抜き、アーニヤはシルヴァーナの手を愛おしそうに撫でる。渴いた皺っぽい手はいつものように暖かく、シルヴァーナはほっとすると肩の力を抜いた。けれど、こんな暖かい手も無く、きつと今もどこかで一人背を丸めている彼がいる。大切な人達に次々に先立たれ、遂に、本当にたった一人残されてしまった辛さは彼女には痛い程分かる。もう、彼の希望になりえた筈のロミオはいない。

シルヴァーナは瞼の裏に、あの日の夜のベンヴォーリオを思い浮かべる。抱き締められるのではなく、抱き締めたかった寂しい姿。あ

んな風に憤りをぶつけるのではなく、本当は一晩中でも慰めていたかった。

「……ありがとうございます……。でも、ごめんなさい……。私……もうきつとあの方を愛してしまっています」

「シルヴァーナ……」

「例えあの方が私の事を何とも思っていないなくても……また傷付くだけかもしれない、私は今すぐあの方の傍に行きたい……。アーニヤさん……、これが愛するという事なのでしょう？ 両親や、ロミオ様とジュリエットさんが貫いたその想いが今私にもある……。私はその人達の分までそれを大切にしたいんです」

こんな気持ちは初めてだった。今ならロミオとジュリエットの気持ちが分かる気がする。愛する人を一人にしまうのも、愛する人に一人置いて行かれてしまうのも堪えられない。両親もきつと辛かったに違いない。父は最期の瞬間、きつと母の事を想っただろう。母は嘆いて後を追いたくて、それでもお腹の子の為に生きてくれた。

シルヴァーナは改めて母に、両親に感謝すると、アーニヤに笑みを向ける。

だからこそ今ここに彼女は立っていてられて、恋も出来る。生まれた奇跡、出会えた奇跡、愛する奇跡、それらに比べれば、生まれ持った身分や家名なんて些細な物ではないか。

「アーニヤさん……、ロミオ様が言ったそうです。同じ人間同士憎しみ合うのは止める、人は自由に生きるものだ、と。それは身分を超越する事はないのでしょうか？ ロミオ様達がお互いの家名を乗り越えたように、乗り越える事は出来ないのでしょうか？」

ロミオは正しい。そしてベンヴォーリオはその言葉を聞いた時、どう思ったのだろう。

「…私は信じたいから、報われなくても良いからあの方の元に行きたい。せめて、立ち上がる杖にでもなれたら…」

「……………分かったよ、もう止めない」

「アーニヤさん…！」

シルヴァーナの想いの強さを感じ取り、アーニヤは深い溜息を吐くと、やれやれと呆れた様に彼女を見た。アーニヤの丸い目からはもう生真面目な色は消えている。

「全く…とうとう言っちゃったね…。これだから若いもんは気が早
いって言ってるんだよ」

「ごめんなさい…」

「いいや。…分かってたよ、あんたがあの方に惹かれて行ってる
て事」

「私は今気付きました」

「はは、鈍い娘だねえ。…行つといで。あんたならきつとベンヴオ
ーリオ様を救える」

アーニヤはにつこりと笑ってポンポンとシルヴァーナの腕を促す様
に叩く。

「え…？」

「あんな天の邪鬼をそこまで想えるなんて酔狂なのはそうそういな
い。杖だなんて小さな事言っていないで、縛って引き摺って来れる口
ーブくらいの気概で行き」

「——はい…！」

まだまだ知らないヴェローナを、それでもシルヴァーナは駆け抜ける。一番最初に感じた様な恥ずかしさも目を楽しませた街並みも今はちつとも気にならない。ただベンヴオーリオの姿だけを探して彼女は走っていた。だが、アーニャが教えてくれたよくモンタギューの若者達が集まると言う場所にも、悲劇の現場キャピュレット家の霊廟にもその姿は無く、誰に聞いても彼の居場所を知る者はいなかった。

シルヴァーナは闇雲に走った末、一旦路地の壁に手を着いて膝を掴んで足を休める。肩で息をしながら額の汗を拭い、一度背後を振り返るが、もうとつくに屋敷に戻る道は分からなくなっていた。しかしベンヴオーリオを見つけさえすれば、きっとまた道案内をしてくれる筈だと思えばそれは全く気にならず、シルヴァーナは萎える事の無い思いに再び顔を上げた。だがその時、ふと路地の片隅にひっそりと生えたマーガレットが目端に映り、思わず意識をそちらに取られる。一軒の家屋の裏口の植木鉢に植えられているそのマーガレットは、さわさわと風に揺れていた。

「……………」

シルヴァーナは屋敷を出る前にもこれと同じマーガレットを見ていた。それは他ならぬ自分のベッドの傍に飾った、彼女の為に送られたマーガレットだ。許しを貰い屋敷を出る時、シルヴァーナはヴェローナに来た時に着ていたこの白いワンピースに着替えた。何故かあの使用人用の青い服では連れ戻せないと思ったからだ。その時傍にあったのがそのマーガレットで、彼女はそれたった一輪だけの白い花に願いを籠めていた。今やそのマーガレットは彼女にとっては恋の花になつていたので。元々マーガレットは恋占いの花と認識があったが、今の彼女にはその花弁を抜いてしまう事など到底出来ず、枯れて散るものなら、この想いまで散ってしまいそうな気さえしていた。ただの野花をこんなにも愛おしく思うのは、それが彼から

の唯一の真実の想いのプレゼントだったから。もつとも、そう思っているのはシルヴァーナだけで、彼にとってはただ目に付いたからついでに手折って置いていただけなのかもしれないが。

シルヴァーナはそれが最も彼らしい事だと思い苦笑すると、今度こそ足を踏み出そうとして、しかしぽかんとした。

「――…ベン、ヴォーリオ…様…？」

呆然と呟いたシルヴァーナが見上げた目線の遠く先には、青い空に飛んで行った綿毛のようなタンポポ頭があつた。路地の先の石段を上がった見張り場のような高台で、こちらに後頭部を向けているのは間違いなくベンヴォーリオだった。

白と青

遂に見付けた、とシルヴァーナはのろのろと歩き出した足を徐々に速める。そして一息に石段を駆け上ると、ようやくベンヴォーリオの背中を視界に捉えた。

「っ……」

だが、もうすぐ近くまで来てシルヴァーナは足を止める。別に自分でなくとも、もし他の誰かが彼の傍にいてくれたらそれでもいいと思っていた。寧ろ周りに人が溢れる彼ならそれが当然だろうとも心のどこかで自分を慰めていたけれど、彼は本当にぽつんと、たった一人だけでそこに立っていた。

こんなひっそりとした場所で風に黒いジャケットを翻し、鉄柵に頬杖を付いて微動だにしないその背中が酷く頼りなく見えて、シルヴァーナはチクリと痛む胸を押さえた。

「……ベンヴォーリオ様……」

「……」

苦しさを吐き出す様にそっと呼ぶと、彼はピクリと反応して振り返る。

「——シルヴァーナ……」

そしてシルヴァーナを視界に捉えると目を見開いた。

「どうして君が…」

「探しました…」

「……」

ゆっくりと近付いて手を差し出すと、ベンヴオーリオはぐつと歪めた顔を逸らして、また背を向ける。

「だ、誰に頼まれたか知らないが、こんな所まで来るなんて君はよっぽど暇なんだな。そもそも俺は誰にもここにいる事を言っていないのに、ろくにこの街の事も知らない田舎者の君が探しに来るなんて、帰れなくなったらどうするつもりだったんだ」

「…はい。だから、また道案内をして下さい。…一緒に、帰りましょう?」

「っ……………」

ベンヴオーリオは背中を向けたまま、鉄柵の手摺を強く掴んでいる。先程の顔を背ける瞬間、彼の目に光る物があつたのを見逃していなかったシルヴァーナは、更に近付くとそつと彼の背中に寄り添い、目を閉じた。

「ベンヴオーリオ様…」

そうして労る様に背を撫でると、背中越しにベンヴオーリオが息を飲んだのが分かった。

「……………君は…変な奴だ…」

「え?」

シルヴァーナは顔を上げるが、やはり彼の顔は前を向いたままで窺

えない。ただほんの少しだけ声が震えている。

「俺は親の仇にも等しい人間なんだろう？それに三日前も、その前にも酷い事をしたのに、またこうして一人でやって来るなんて意味が分らない」

「ベンヴオーリオ様……」

「俺は……君に嫌われているんじゃないのか？」

「そんな……嫌うだなんて……。それに父の事は昔の話で、ベンヴオーリオ様は関わって無いじゃないですか」

「でも俺は君の父親を殺したモンタギューの今の時代の人間で、実際同じ様な事件を起こしてる。君が言ったんじゃないか、争いが嫌いだって……」

そんなつもりはなかったが、こんな風に自分に返って来るとは思わず、シルヴァーナは言葉に詰まる。しかし、どう言われようと彼女にベンヴオーリオを憎む気持ちは微塵も無い。

「……確かに争いは嫌いです。それを起こすモンタギューもキャピュレットも。でも、ベンヴオーリオ様はベンヴオーリオ様です。モンタギューがどうか、関係ありません。私は……優しくして貰ったから。この街に来て初めて優しくして貰って、ただ嬉しかったから……」

「あれは気紛れだ。たまたま突っ立っている君を見付けて、たまたま暇だったから相手をしただけだ。なのに君はたったそれだけお節介も甚だしくここまで来たって言うのか？」

ベンヴオーリオはまるで素っ気無いが、それが素直でない彼のいつもの憎まれ口である事を彼女は知っている。

「……ベンヴオーリオ様は、独りでも寂しくはないのですか？」

「……………」

「私は寂しかったから、それだけでも嬉しかったです。どんなに意地悪をされても、私が最初に知ったのは貴方の優しい面だから、その面影が邪魔をして嫌いだなんて思えなかった…」

「…君は、マゾなんだな…」

「マゾ…？」

「…虐められるのが好きって事だ。…ああ、もう、本当に君は物を知らないな」

ベンヴォーリオは急に肩を落とし、呆れた様に深く溜息を吐いて頭を掻くと、突然振り向いて聞き慣れない言葉に首を傾ていたシルヴァーナを抱き締めた。

「全くなんだってあの日の俺は君みたいな面倒臭い子を少しでも相手にしてしまったんだろう。お陰で今日の俺が尚更寂しさを思い知らされてる」

「ベンヴォーリオ様…」

シルヴァーナは驚きつつも、恐る恐るジャケットの脇を握る。

「…慰めに来たんだろう？ちゃんとしっかり抱き締めてくれよ」

「っ…?!」

恥ずかし気もなく拗ねるように言われ、シルヴァーナは思わず頬を染める。同時に赤くなっただろう耳を見たのか、ベンヴォーリオの呆れたような苦笑が耳許で聞こえた。

「未遂とはいえ一夜を共にした仲なんだ。今更照れるなよ」

「あれはっ…」

そちらが無理矢理押し倒したのではないか、と思わず抗議の声を上

げようとしたが、急に更にきつく抱き締められ、シルヴァーナは出掛かった声を飲み込んだ。

「お願いだ…。今は、顔を見られたくないんだよ…」

「――…」

今までと一転して、ベンヴオーリオは何かを堪えるように声を詰まらせながら縋って来る。悪戯心からでも自棄でもないそれにシルヴァーナは切なく目を細めると、そつと背中に手を回してベンヴオーリオに身を任せた。風の音に混じって、頑なだった殻が剥がれるように彼の悔恨が始まる。

「俺だって、一人は寂しい…。ロミオは俺を置いて逝ってしまった…。俺達はあるなに仲が良かったのに、あいつは俺を置いて行く事なんて微塵も気にせず、無垢な子供のように幸せそうな顔でジュリエットと逝ってしまったんだ…。俺の所為だ…。俺がロミオにジュリエットの死を伝えてしまったから、二人の未来を狂わせてしまった…」

「ベンヴオーリオ様つ…」

それは違う、と顔を上げて腕から逃れようとしたが、ベンヴオーリオは首を振ってそれを拒む。

「君に言われて、遠く離れてもロミオが生きているならそれでいいと、ようやく思えそうだったのに、俺自身がそれを台無しにしてしまった…」

「っ…」

「世の中上手く行かないものだ…。マーキューシオもティボルトも、皆死んでようやくキャピュレットと和解して、でも一番それを願っていたロミオももういなくて、それを仕向けた俺が生き残って

未来を生きる…。考えれば考える程嫌気が差す…」

「ベンヴオーリオ様…」

「…おい、どうして君が泣いてるんだよ」

肩越しにそう言われ、シルヴァーナは初めて自分が泣いている事に気付き、目を瞬かせる。だが一度気付くと一気に止まらなくなり、ぼろぼろと涙を零してベンヴオーリオの肩を濡らした。

「全く…初めて会った時は気丈なヤツだと思ったけど、存外泣き虫なんだな君は。泣きたいのは寧ろこっちだっていうのに」

慰めたかった筈なのに、反対にぼんぼんと頭を叩かれて、シルヴァーナは情けなさに目を伏せる。ずっとしっかりしなくては、と思っていたのに、こちらに来てからはちつともそれが果たせていない。

「ごめんなさい…。でも…そんな風に思っただけで欲しくなくて…」

「俺は何か間違ってる？」

「だって…ベンヴオーリオ様はロミオ様が好きだから…だからロミオ様の大切な人の死をご自身で伝えようと思ったのでしょうか…？」

シルヴァーナは嗚咽を堪えながら途切れ途切れに話す。彼のロミオへの一途な想いが哀しくて、愛しくて胸が苦しい。

「ロミオ様が悲しむのを分かっていて…それでも伝えたのは、せめてロミオ様に一人で泣いて欲しく無かったからなのではないですか…？」

「でもそれが仇になった…」

「それでも…その想いの源が愛なら、誰もそれを咎める事なんて出来ません」

「愛…」

「そうです。愛です」

緩んだ腕から顔を上げると、シルヴァーナは無理矢理涙を拭いて止め、身体を少し離すとベンヴォーリオの顔を真摯に見る。彼はまるで親とはぐれた子供のように不安な表情を隠す事もなく、シルヴァーナをじっと見返して来る。

「ベンヴォーリオ様はロミオ様を愛していたから伝えたのです。ジュリエットさんと神父様の企ても愛故にです。ロミオ様が後を追ったのもジュリエットさんを愛していたからです。…その証拠に、争いが無くなったでしょう？それは皆さんがお二人の命懸けの愛を無駄にしていけないと思ったからなのではないですか？」

「それは…」

「それなのにどうしてベンヴォーリオ様だけを咎められるのですか。そこでちゃんと過ちに気付けた人をそれ以上誰が罰せるのです？ベンヴォーリオ様…、これは誰も悪くなんかないのです。確かに不幸には違いないけれど、それは愛がすれ違っただけで、悪意はそこには存在しなかった筈です」

本当に世の中は上手く行かないものだと思う。シルヴァーナのように貧しくても人に恵まれる人がいて、ベンヴォーリオのように豊かでも人を失って行く人がいる。そして、強く愛すれば愛する程すれ違う人達がいる。

「ベンヴォーリオ様、だから私達はせめて命を…未来を大切に生きましょう？ロミオ様とジュリエットさんの愛がもたらしてくれた、争いのない未来を守りましょう…？」

「シルヴァーナ…」

シルヴァーナはふ、とベンヴォーリオから目を離すと、鉄柵に手を

付いてそこからヴェローナの街を一望する。一面オレンジ色の屋根達は陽の光を弾き、その下の隙間を人が歩き、上では鳩が飛んで影を作る。その中心付近にどっしりと構える古代の遺跡は、このヴェローナの歴史の長さを静かに物語っている。

「ほら、見て下さい、ベンヴォーリオ様。ヴェローナはこんなに綺麗です。私達はこれからもずっとこれを見られるんですよ」

争いの影が消えた街はもう美しいばかりで、無情には見えなかった。だが、ふと胸に過った切なさ、きつと一生消える事のない喪失の傷跡だろう。もっと早く人々が気付いていれば、ロミオ達は死なずに済んだのだろうか。もっともっと早くそれが訪れていれば、両親は幸せになっていたのだろうか。

「本当だ…。こんなに静かで穏やかなヴェローナは初めてだ…」

だが、それらがあつたからこそ、今この時がある。

シルヴァーナは背中に感じる温もりに身を預けて、目を細める。ならば彼等の為に出来る事は、やはりその死を無駄にせず生きる事だろう。

「…あの雲を見ていると、君を思い出す」

「雲…？」

お互いの温もりを感じながら暫し静かに景色を眺めていたが、ひっそりとした声に振り向けば、ベンヴォーリオは街ではなく空を見上げていて、シルヴァーナもつられると青く晴れ渡った空を仰いだ。

「あんなに一面に青色が広がっているのに、雲はそれに溶ける事もなく白いままだ。…何色にも染まらないと言っていた君を思い出す」

…」
「あ…」

初めて出会った時、確かにシルヴァーナは彼にそう断言していた。母の最後の言い付けを頑なに守って。ベンヴォーリオは苦笑すると、彼女の頭をくしゃつと撫でる。

「本当に君は染まらなかったな…」

「ベンヴォーリオ様…」

「その白い服、あの時来ていた服だろう？ やっぱりそれ、嫌いじゃないな。君には白がよく似合っている」

「そんな…」

「…そうだ。だからあの花だって、本当に悪いと思ったからちゃんと君の為に白いのを選んだんだぞ」

「えっ…」

胸許のリボンを弄べながらシルヴァーナは気恥ずかしさに頬を染めていたが、それを聞いて目を丸くすると、身じろぎして慌ててベンヴォーリオを振り仰いだ。

「目に付いたからついでに下さったのではないのですか？」

「おいおい、それはないだろ。人が折角朝から柄でもない花摘みなんて真似をわざわざ恥を忍んでやったっていうのに」

「ごめんなさい、私でつきり…」

「ちえ、なんだよそれ。君は俺をそんなにデリカシーの無い男だと思っているのか？」

ベンヴォーリオは盛大に顔を顰めると、抱き締めていた腕を解いて頭の後ろで手を組む。だがシルヴァーナは胸の前で手を組むと、目に涙を溜めてくしゃりと笑った。

「いえ…そうじゃなくて…。嬉しくて…」

「シルヴァーナ…」

彼女の震える声に、今度はベンヴォーリオが目を丸くする。

「やっぱりベンヴォーリオ様はお優しい方です…。あの時出会えて…信じて本当に良かった…」

「…馬鹿、優しいのは君の方だ」

笑いながら涙を零すシルヴァーナに罰悪そうに目を逸らすと、ベンヴォーリオは軽く彼女の額を小突く。

「世間知らずな田舎者で馬鹿正直で、その癖気が強くてお節介だ。

将来アーニヤみたいになってしまふんじゃないのか？」

「アーニヤさんは素敵な方だから、憧れます…」

「おい冗談に決まってるだろ。止めてくれよ想像したくも無い」

「また…、本当は優しいのにどうしてそんな憎まれ口ばかり叩くんですか…」

「うるさいな」

拗ねてそっぽを向くベンヴォーリオに思わずクスクスと笑うが、やや置いて彼が少しばかり真剣な眼差しでこちらを見て来たから、シルヴァーナは笑うのを止めるときよんとする。

「…君は、幾つだったっけ？」

「…？16になりました」

首を傾げながらも答えると、ベンヴォーリオは16か、と呟く。

「じゃあ…結婚もすぐするのかな」

「結婚…ですか？」

後に続いた意外な言葉に目をぱちくりさせる彼女にベンヴォーリオは微笑う。

「ああ、世間ではもうとつくに適齢期だろう？」

「ええと…」

そう言われても、とシルヴァーナは視線を泳がす。考えた事がない事もないような気もするが、相手もまだ見付かっていないのに、いきなり何を言い出すのかと困惑する。それにもし例えそんな相手がいたとしても、彼女には自ら言い出す勇氣はきつと無いだろう。何より今こうして傍にいられるだけでも嬉しいのだから、そんな事はまだまだ到底考えられない。

そう、考えられないが、浮かんだ顔は。

「…でも」

「…？」

思っていると急に頭上に影が射して、思わず見上げるとそのまま顎を掬われて間近にベンヴォーリオの顔が迫る。

「もし君がその内俺より良い男を見付けて結婚なんて事になったら、俺はきつと物凄く嫉妬するんだろうな」

「……」

驚いて息を飲むシルヴァーナにベンヴォーリオは妖しく笑って、腰にも腕を回すと顎を掬った親指で彼女の唇をゆっくりなぞった。

「だって、二度迫つても開かなかった、君のこの頑な開かずの間の
ような唇が他の男の物になるんだろう？俺はその鍵を開けられる男
が羨まし過ぎて、みつともなくなってしまうかもしれない」

周りの音が全て消失してしまつたかのようにシルヴァーナの耳は彼
の甘い声だけを拾い、信じられない、と目を見開きながらも早く大
きくなる鼓動は、相手に聞こえない事が不思議な程だった。

「シルヴァーナ…、もし今ここで今度こそ俺がそれをこじ開けてし
まつたら、君はまた怒ってしまうかな？それとも、君自ら鍵を渡し
てくれる？」

尚も手を緩める様子のないベンヴォーリオに、彼女は真つ赤になる
頬を隠すように顔を逸らすと、恥ずかしさから精一杯の抵抗を試み
る。

「…べ、ベンヴォーリオ様の言う事は難し過ぎて、私にはよく分か
りません…」

「それは、誘つてゐるつもりかい——？」

しかしそれは何の効力も持たず、再び簡単に顎を掬われると、その
まま攫う様について唇まで奪われてしまった。

「——ん……」

その突然の事に成す術もなく受け入れてしまい、彼女にとっては長
い長いそれが終わった時には、余りの緊張から解放された安堵で、
すっかり身体中の力が抜けてしまっていた。

「——…こういう事だよ。…あ、結局こじ開けてしまつたな」

「っ……」

シルヴァーナはベンヴォーリオの胸許をぎゅっと掴んで凭れ掛かるが、彼は全く悪びれる様子もなくにこりと笑うと、再び彼女の頬に手を添えて、額同士を合わせて来た。

「俺の傍にずっといて欲しい……」

「……え……?」

「もし俺がそう言ったら、シルヴァーナ、君はどうする?俺の傍に……いてくれる?」

不敵な笑みを浮かべ、一方的に強引に進めているくせに、その瞳の奥は不安そうにシルヴァーナを窺っている。それは応えてもらえるかどうかの不安か、それともまた残されてしまうかもしれない事への恐怖か。シルヴァーナは傍を離れる気なんてさらさらないのに、そんな事を心配するような彼を仕方なく思いながらも、まだ騒ぐ胸を押さえ、深い息を吐くと目を伏せがちに呟いた。

「……貴方が、それを望んで下さるのなら……」

「シルヴァーナ……」

「でも……」

しかし、シルヴァーナもまだ残る不安におずおずと目を上げると、彼に視線を合わせる。

「でも、もし……もう私が貴方だけの色に染まっていたとしたら、貴方は私を嫌いになりますか……?」

白が似合うと言ってくれた。何色にも染まらなかったと彼は言ったけれど、本当はもうこんなに彼の事だけを想ってしまう程、シルヴ

アーナの心はベンヴオーリオで埋め尽くされていた。人を愛するという事がこんなにも強い想いを生むのだという事を今まで知らなかった彼女は、恐怖さえ感じるそれに怯えて震えてしまう。だが、ベンヴオーリオはそんな身体を優しく包み込むと、安心させるように髪を梳いてくれた。

「…いいや、君は君だろう？寧ろ嬉しいくらいさ。君が何色だろうと関係無い、俺は他の誰でもない君自身に惚れたんだから」

「ベンヴオーリオ様…」

視界が滲むシルヴァーナの目尻を指で拭って、ベンヴオーリオは顔を覗き込んで来る。

「で、君は？君は俺の事をどう思っているんだ？」

それはいつかロミオに向けていたような優しい笑みだと思うが、それ以上に熱っぽい色が宿る瞳に、微かな羞恥心が過る。だが、シルヴァーナはせめて目を閉じてその熱い視線から逃れると、震える唇で呟いた。

「…愛、してます…」

同時に、額に一つキスを落とされる。

「——もう一度…」

「愛しています…」

次は右頬に、その次は左頬に、そして瞼にと、唇から愛が紡がれる度に一つずつ落とされて行く。

「もつと…」

「愛……」

そして最後には唇が塞がれ、彼女は全てを愛する彼に包まれた。

「俺も…愛してる。君に出逢えて…君がいてくれて、本当に良かった。シルヴァーナ……」

——シルヴァーナ、ヴェローナへ行きなさい。

母が死んで、まだ16になったばかりの彼女はたった一人村を出た。寂しさと不安に押し潰されそうになりながらも、これからはもう独りなのだと気丈に顔を上げた彼女に、最初に声を掛けたのは彼女だった。その時から彼女はもう、独りではなくなっていた。

それからたったの四日間。めまぐるしく過ぎたその四日間で、彼は失い、彼女は人の愚かさを知った。けれど最後に得て、そして知った物は余りにも当たり前のようにそこにあったモノで、万人に注がれるべきそれはひどく暖かく懐かしかった。人の血に流れる毒を浄化するように今もゆっくりと降り注ぐそれは、ヴェローナ中を包み込み、爽やかな風は優しく人々の頬を撫でた。

ヴェローナを吹き抜ける風は、もはや死の匂いはしない。あるのはただ、愛を告げる鐘の音を運ぶ風と、それを彩る青い空と白い雲だけだった。

完

白と青（後書き）

お粗末様でした。

どうにか無事8月中に終える事が出来ました。実はロミジュリは一回しか観れてなくて、しかもベン様をずっと見てたので、時系列や物語、人物像はちょっと記憶が怪しい為、パンフレットやそれこそ原作の方の設定を参考にしたりして、その中でも自分なりにベンヴォーリオはどういう人だろうと、精一杯考えながら愛と勢いだけで書き上げました。まあ結果すずみんの作った可愛げが全く無い、かなりひねくれた面倒臭そうな人物になっちゃいました…。そういえば、原作の面倒臭い台詞回しも少しは真似てみたかったんですが、自分には到底無理でした…。

物語の最後、若者達の中でたった一人だけ残される可哀相な彼ですが、本当のその後が気になる所です。幸せになれたのかな？

最後に、こんな妄想文をここまで読んで下さった皆様には心からお礼申し上げます。

イメージと違ったり、時系列が間違ってる所もあるかもしれませんが、この場は一先ずこれで締めさせて頂きたいと思います。

本当に有り難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047n/>

白と青

2011年11月15日18時15分発行